

(1) 哺乳類

【掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2019」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、本調査及び過去のレッドデータブックあいち（2002年版ブック・2009年版ブック・2015年版リスト）作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。また、一時的な出現地域は○印で、絶滅が確認された過去の生息地は†印で、絶滅している可能性が高い過去の生息地は？印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても1点として表示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。ウェブページ上の情報については、URLを掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 哺乳類 執筆責任者 】

子安和弘
織田銑一

【 哺乳類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

上村友久 大池辰也 大内秀之 大畑孝二 岡田慶範 小鹿 亨 小鹿登美
織田銑一 加藤貞亨 川島賢治 佐竹義雄 杉山時雄 曾根啓子 寺西敏夫
戸田尚希 中尾文香 夏目明香 名和 明 長谷川明子 長谷川道明 萩原聖子
水野マリ子 山崎 健 安井謙介 吉鶴靖則

愛知学院大学歯学部歯科資料展示室 勇魚会 志摩半島野生動物研究会 豊田哺乳類研究会
豊田市自然観察の森 豊橋市立自然史博物館 名古屋哺乳類研究会

(敬称略)

情報の提供、データベース作成で御協力いただいた関係者で、上記の方々以外にも多数いらっしゃるが、関係者の皆様にここで深い感謝の念を表明しておきたい。

オオカミ *Canis lupus* Linnaeus

【選定理由】

かつて北海道・本州・四国・九州に生息していたが、北海道では1800年代末に、本州では1905年奈良県での捕獲記録を最後に絶滅した。県内では1600年代末から1700年代中期に名古屋市内外に出没したことが『鸚鵡籠中記』に述べられており(朝日, 1995)、比較的最近まで生息していたことは確かであるが、1900年代以降はまったく記録がない(子安・織田, 2009など)。

【形態】

頭胴長 950~1290mm、尾長 270~400mm、後足長 245~250mm、耳介長 80~115mm、頭骨最大長 186.0~269.5mm。イヌに似ているが体が細く、体毛が長い。四肢が長く、趾行性。前足に5指、後足に4指をもつが前足の第1指(母指)は接地しない。陰茎骨をもつ。頭骨形態では吻が非常に細長く、前頭部が相対的に低くなっているために横から見ると鼻骨前端から前頭部にかけての凹みが浅い。乳頭式は1+2+1=8。歯式はI3/3, C1/1, P4/4, M2/3=42(子安・織田, 2009など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在日本国内で絶滅しており、県内にも分布しない。オオカミの出土した遺跡には、清須市朝日西遺跡(弥生時代：愛知県埋蔵文化財センター, 1992)、豊川市小坂井町平井遺跡(縄文時代：酒詰, 1961)、田原市渥美地域伊川津貝塚(縄文時代：伊川津遺跡発掘調査団, 1988)がある。歴史時代になってからは、1600年代末から1700年代(犬山市、扶桑町、江南市、大口町、旧春日井郡、小牧市、春日井市、名古屋市北区・天白区、知多半島、旧額田郡：新家, 2005; 名和・野呂, 2015)、明治の中頃まで(設楽町：伊藤, 1956)、年代不明の安城市(不明, 1937)などの記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布していたが、北海道では1800年代末に、本州では1905年の記録(奈良県)を最後に絶滅(Endo, 2015)。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北米大陸(Endo, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

かつての国内の生息地であった、北海道、本州、四国、九州のすべての地域で絶滅している。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内・県内で絶滅している。北海道ではニホンジカを主食にしていたため、乱獲によるシカの激減にともなって家畜を襲うようになり、積極的な駆除活動のおこなわれたことが絶滅の要因として重要と考えられるが、本州では農耕地の拡大にともなう大型草食獣の減少のほか、疾病の流行もオオカミの減少の要因と考えられる。絶滅の背景として、後期更新世以降の温暖化、島嶼化と開発の進行があり、体の小型化と絶滅に関係があるといわれている(宮尾ほか, 1984)。

【保全上の留意点】

国内・県内で絶滅し、オオカミの生存を可能にする広大な森林などの環境も残されていない。

【特記事項】

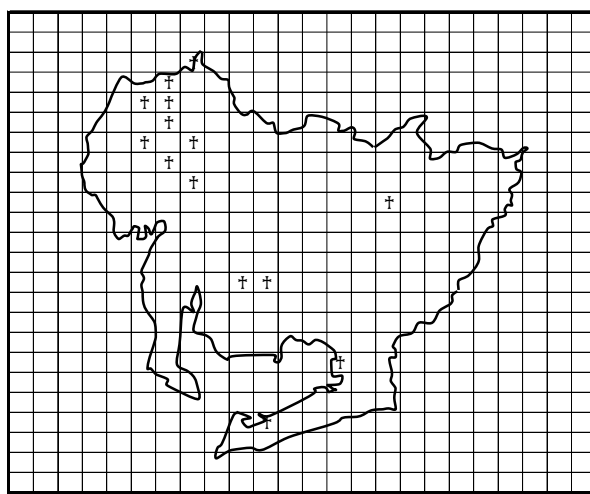
種の保存法による国際希少野生動物種。下顎第一大臼歯の長さ(歯冠近遠心径)は先史時代までは明らかに大型のイヌよりも大きいのが、歴史時代になると重なりがみられる(宮尾ほか, 1984)。名古屋市北区と天白区における記録は、名和・野呂(2015)によっても記述されている。中日新聞の前身の一つである「新愛知」(1937年1月30日付)には、愛知県第一師範学校教頭の神谷信行氏の自宅(三河国安城)に保存されていた頭骨がオオカミである可能性に神谷氏が気づき、広島文理大学の阿部余四男博士に鑑定を求め間違いのなかったことが記述されているため、安城市近辺における過去の生息ならびに絶滅が示された。化石は中期および後期更新世から産出している(Endo, 2015)。

【引用文献】

- 朝日重章, 1995. 摘録鸚鵡籠中記(下)元禄武士の日記, 374pp. 岩波書店, 東京.
愛知県埋蔵文化財センター, 1992. 朝日西遺跡, 318pp. 愛知県埋蔵文化財センター, 愛知県海部郡弥富町.
Endo, H. 2015. *Canis lupus* Linnaeus, 1758. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.226-227. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
不明, 1937. 神谷氏の貢献学会の謎を解く 日本狼の棲息を証明. 新愛知(1937年1月30日付), 名古屋.
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 伊川津遺跡. 渥美町埋蔵文化財調査報告書4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
子安和弘・織田銃一, 2009. オオカミ. レッドデータブックあいち2009動物編, p.65. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
宮尾嶺雄・西沢寿晃・花村肇・子安和弘, 1984. 早期縄文時代長野県原岩遺跡出土の哺乳動物, 第7報オオカミの骨と歯, 成長, 23(2): 40-55.
名和 明・野呂達哉, 2015. オオカミ. レッドデータブックなごや2015動物編, p.35. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
新家 欽佑, 2005. 狼、暴れ候：日記にみる尾張藩事件簿, 127pp. 新風社, 東京.
酒詰 伸男, 1984. 日本縄文石器時代食料総説, 再版, 338pp. 土曜会, 京都.

(子安和弘・織田銃一)

県内分布図



カワウソ *Lutra lutra* (Linnaeus)

【選定理由】

国内では 1923～1927 年頃までは全国各地で毎年 35～120 頭が捕獲されていた。1928 年に捕獲が禁止された後も減少をつづけ、1979 年の高知県での記録以降は生息が確認されていない。県内では 1923 年までに絶滅状態になったと考えられている (子安・織田, 2009 など)。

【形態】

頭胴長 645～820mm、尾長 390～489mm、後足長 117.5～134.0mm、耳介長 21～27mm、頭骨基底全長 105.8～119.2mm。水生に適応しており、頑丈で細長く円筒状の体をしている。短い前肢と後肢の指趾には水かきがある。背面の毛色は黄褐色で、腹面は淡灰褐色をしている。尾は基部が太く、胴からなめらかに移行しているのでその境界部は不明瞭である。頭蓋は扁平で吻が短い。鼓室泡は低くて三角形をしている。歯式は I3/3, C1/1, P4/3, M1/2=36 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

日本国内では絶滅したと考えられており、現在は県内に分布しない。西尾市八王子貝塚 (縄文時代：宮尾ほか, 1990) と田原市伊川津貝塚 (縄文時代：伊川津遺跡発掘調査団, 1988)、清須市朝日西遺跡 (弥生時代：愛知県埋蔵文化財センター, 1992) で遺存骨が出土している。1737 年頃の丹羽郡と海西郡 (現海部郡の一部：宮尾, 1985)、1887 年頃の篠島 (南知多町：出村, 1921)、1913 年前後の新城市長篠 (長篠郷土研究会, 1958)、1920～1930 年頃の岡崎市宮崎 (子安, 2014)、1945 年以前の豊川市 (豊川市役所, 1973) に記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に生息していたが、北海道では 1955 年に、四国では 1979 年に絶滅したと考えられていた (子安・織田, 2009 など)。長崎県の対馬では、2017 年から 2018 年 12 月にかけて、血縁関係のない 4 頭 (雄 2 頭、雌 2 頭) のユーラシアカワウソが確認され韓国から漂着したと考えられている (不明, 2019)。

【世界の分布】

ヨーロッパ、アジア、北部アフリカ (Sasaki, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

高知県南西部に生存する可能性も完全には否定できないが、国内ですでに絶滅状態と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

禁猟になる 1928 年までの乱獲と河川環境の悪化により絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

乱獲の原因はカワウソの良質な毛皮が高値で取引されたことであるが、さらに水系の汚染や護岸工事といった生息環境の破壊がカワウソを絶滅させた可能性がある。現在、県内にカワウソの生息が可能な環境は認められず、分布を回復させうる余地は残されていない (子安・織田, 2009 など)。

【特記事項】

愛知県では奥三河山間部を除く県内全域にヌートリアが生息しており、カワウソの最近の記録の中にはヌートリアを誤認したのがあると考えられる。日本哺乳類学会では絶滅危惧種とされる (佐々木, 1997)。種の保存法での国際希少野生動物種。文化財保護法による特別天然記念物。

【引用文献】

- 愛知県埋蔵文化財センター, 1992. 朝日西遺跡, 318pp. 愛知県埋蔵文化財センター, 愛知県海部郡弥富町.
出村 鈺, 1921. 篠島史蹟, 151pp. 博信社, 名古屋市.
不明, 2019. カワウソ生息 対馬で 4 匹目. 中日新聞 (2019 年 6 月 5 日付朝刊), p.21. 名古屋.
伊川津遺跡発掘調査団 (編), 1988. 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
子安和弘, 2014. カワウソ. レッドデータブックおかげさき 2014, p.164. 岡崎市, 岡崎.
子安和弘・織田銃一, 2009. カワウソ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.67. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
宮尾嶽雄, 1985. 哺乳類. 西春町史資料編 2, pp.221-259. 西春町史編集委員会, 愛知県西春町.
宮尾嶽雄・酒井英一・子安和弘・蜂矢喜一郎, 1990. 愛知県西尾市八王子貝塚出土の陸上哺乳類遺存体, pp.32. 西尾市教育委員会, 愛知県西尾市.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.
Sasaki, H. 2015. *Lutra lutra* (Linnaeus). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.262-263. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
豊川市役所, 1973. 豊川市史, 852pp. 豊川市, 愛知県豊川市.

(子安和弘・織田銃一)

ニホンアシカ *Zalophus japonicus* (Peter)

【選定理由】

かつて日本近海に広く分布し、国内での繁殖も確認されている(伊藤・中村, 1994)。1949~1975年の間に8地点13例以上の生息確認と2地点での繁殖が確認されているので絶滅と断定できない(伊藤, 1997)。先史時代には三河湾内の複数の地点で生息していたことが確認されているが、南知多町篠島では1887年頃、田原市伊良湖岬では1906年頃絶滅したと考えられる(分布の項参照)。

【形態】

体重 445.3~563.0kg(雄)、体長 2317~2484mm(雄)、1640mm(雌)、尾長 390~489mm、頭骨基底長平均(雄)313.8mm(伊藤・井上, 1993)。体毛は雄で暗褐色、雌では灰褐色をしている。吻が長く、小さな耳介をもつ。性的二型があり、雄は雌より頭蓋に大きい。後肢は体の下に曲げることができる。尾は明瞭で陰茎骨をもつ。頭蓋では眼窩間幅が比較的広く、後眼窩突起と翼蝶形骨孔がある。歯式は I3/2, C1/1, P4/4, M2/1=36、上顎第二大臼歯はしばしば欠如する(子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

国内では絶滅した可能性も高く、現在は県内に分布していない。南知多町篠島神明社貝塚(渡辺, 1989)、西尾市枯木宮貝塚(縄文時代)、田原市伊川津遺跡・保美貝塚(ともに縄文時代:伊川津遺跡発掘調査団, 1988; 山崎, 2019)では遺存骨が出土している(子安・織田, 2009)。篠島では1887年頃まで生息しており(出村, 1921)、伊良湖岬(田原市渥美地域)では1859年から1906年頃まで生息していたことが確認されている(伊藤・中村, 1994)。

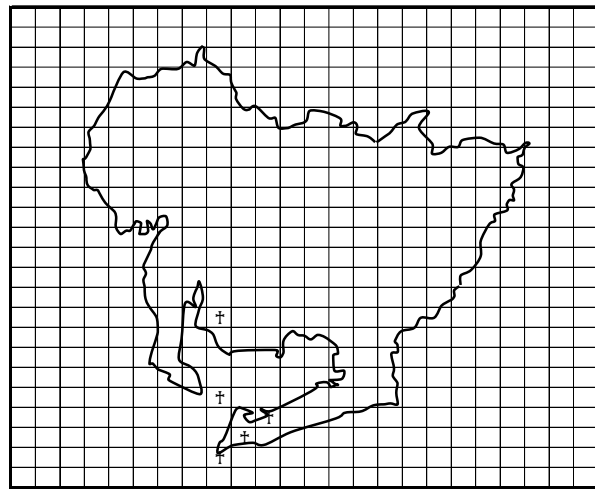
【国内の分布】

日本海側ではサハリン南部から長崎県まで、太平洋側では千島諸島、北海道から宮城県まで分布していたが、1974年に礼文島で捕獲されたのを最後に生息情報がない(伊藤・中村, 1994)。

【世界の分布】

過去の生息地として、日本近海、カムチャッカ、サハリンにおける28地点が図示されている(Isono & Inoue, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

繁殖地の竹島や伊豆諸島では5~6月に雄は十数頭の雌を率いたハレムを形成し、交尾を行っていた(伊藤・中村, 1994)。県沿岸域に継続して生息できる環境は残されていないと考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では現在絶滅しており、生息していない。アシカは繁殖期に限られた繁殖場でのみ繁殖活動を行う生態的特性をもつことから、こうした場所における狩猟活動が減少の要因としてインパクトが強かったと考えられている(伊藤, 1997)。

【保全上の留意点】

1990年代、国内での絶滅は確定しておらず、保全対策として生存個体または個体群の発見と生息調査が提言されていた(伊藤, 1997)。現在IUCNのレッドリストでは絶滅とされ、国際的にも絶滅した可能性が高い。国内または周辺での生息が続いている場合、愛知県沿岸に漂着する可能性もあり、その場合は厳重な個体保護が必要とされる。また、別種とされるカルフォルニアアシカ(*Zalophus californianus*)の漂着にも注意が必要である(子安・織田, 2009)。

【特記事項】

渥美半島の先端に近い田原市保美貝塚からは数多くのニホンアシカが出土しており、伊良湖岬の個体が縄文時代に狩猟されていたことが示されている(山崎, 2019)。尾張藩主徳川宗睦に寛政元年(1789年)に献上された「張州雑誌」にニホンアシカが描かれている(内藤, 1789)。近年、県内におけるアシカの分布は伊良湖岬が著名であったが、明治年代までの篠島(出村, 1921)や知多半島近海(内藤, 1789)での生息ならびに県内で複数の遺跡からの記録は、アシカの生息地として三河湾が重要であったことを示している。

【引用文献】

- 出村 銀, 1921. 篠島史蹟, 170pp. 博信社, 名古屋市。(篠島史蹟復刻実行委員会による復刻版, 1979 による)
伊川津遺跡発掘調査団(編), 1988. 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4. 渥美町教育委員会, 愛知県渥美町.
Isono, T. & Inoue, T. 2015. *Zalophus japonicus* (Peter, 1866). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.297-298. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
伊藤徹魯, 1997. クロアシカ. レッドデータ日本の哺乳類, pp.118-119. 文一総合出版, 東京.
伊藤徹魯・井上貴央, 1993. ニホンアシカ成獣の体長・体重の復元. 成長, 32 (2): 89-97.
伊藤徹魯・中村一恵, 1994. ニホンアシカの復元にむけて(9) ニホンアシカの分布の復元. 海洋と生物, 16 (5): 373-393.
子安和弘・織田銃一, 2009. アシカ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.66. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
内藤東甫, 1789. 張州雑誌. 徳川宗睦. 尾張藩(現名古屋市).
渡辺 誠, 1989. 自然遺物と骨角製品. 神明社貝塚, pp.155-188. 南知多町教育委員会, 愛知県南知多町.
山崎 健, 2019. 保美貝塚. 農耕開始期の動物考古学, pp.91-93. 六一書房, 東京.

(子安和弘・織田銃一)

ミズラモグラ *Euroscaptor mizura* (Günther)

【選定理由】

日本固有種で、本州のみに生息しており、その分布域は青森県から広島県にまでおよんでいる (阿部, 2000)。しかし、各個体群の生息地は分断されており、連続した分布域はほとんどない。愛知県では 5 市町の 6 ヶ所の分布記録があるにすぎず、分布域、生息個体数ともに限られていると考えられる。県内の個体群は孤立しており、生息環境の悪化により絶滅の可能性があると考えられる。

【形態】

体重 26.0~35.5g、頭胴長 77.0~107.0mm、尾長 20.0~26.0mm、後足長 11.0~16.0mm、頭骨最大長 25.5~28.0mm。アズマモグラに似たモグラであるが、体の大きさははるかに小さい。短く太い物の上面前端には前後に長い三角形の裸出部がある。円盤状の鼻鏡の前方に鼻孔が開く。耳介はなく眼は皮下に埋まっている。手掌の長さとはほぼ等しく、長い平爪状の爪を持つ。歯式は I3/3, C1/1, P4/4, M3/3=44、脊柱式は C7+T13+L6+S5+Cd13=44 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市栗栖 (木村・広瀬, 1982)、豊田市寧比首岳 (大多賀町と御内町：子安ほか, 2001)・御所貝津町 (原田, 1996a)、設楽町田口・田峯 (原田, 1996b)、新城市鳳来地域 (原田, 1996a ; b)。

【国内の分布】

本州の山地 (青森、秋田、岩手、宮城、栃木、群馬、埼玉、新潟、富山、石川、長野、山梨、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、奈良、和歌山、鳥取、島根、広島) の 23 府県に生息 (子安・織田, 2009 など)。

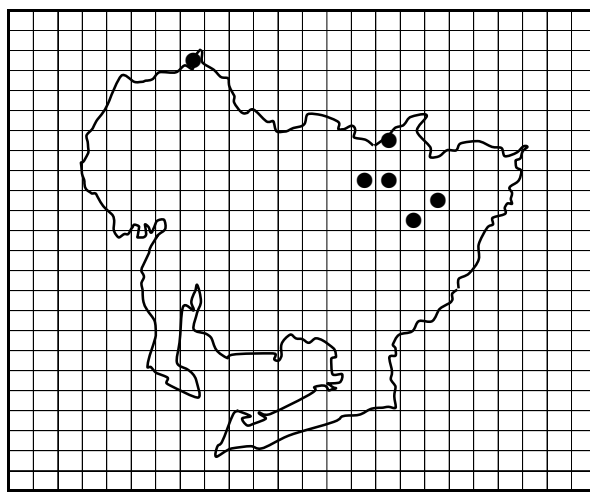
【世界の分布】

日本固有種 (Kawada & Yokohata, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低山から亜高山の針葉樹林にまで生息するとされるが (例えば阿部, 2000)、石川県の白山域では高山帯のハイマツ林縁部や岩場にも生息する。愛知県内には高山帯と亜高山帯域は存在しないので、生息地はすべて山地帯である。県内のミズラモグラは土壌の発達の悪い場所やその周辺に生息すると考えられている (子安ほか, 2001)。生息数が少ないため、生態についてはほとんど情報がない (子安・織田, 2009 など)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内では 6 ヶ所で生息が確認されているにすぎない。もともと生息密度が低い上に、生息域が重複するアズマモグラやコウベモグラという対抗種によって生態的に閉じこめられ、個体群が分断されていると考えられる。こうした小個体群は構成個体数も少なく分布域も狭いため、森林の伐採、単一植生の植林、林道建設やダム工事などによる環境悪化により小個体群が絶滅したと考えられる。

【保全上の留意点】

本種の発見記録のある地点とその周辺では常に本種の小個体群が絶滅する可能性があることを前提とする必要がある。ダム湖や道路整備によって個体群が分断されない対策が必要であるが、生息地の破壊・分断が予測される場合には、回避、低減、代償等のミティゲーションが必要である。

【特記事項】

原田 (1998) によると、ミズラモグラは旧豊根村 (現豊根村豊根区域) でも観察されているというが、標本の所在などの詳細も知ることができていないので、分布域に現在の豊根村 (旧豊根村および旧富山村) を含めることを留保している。山口県、広島県、岐阜県の中期更新世から化石が産出している (Kawada & Yokohata, 2015)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 - 自然 - 本文編, pp.508-513. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』- 資料 -, pp.186-190. 豊川市, 愛知県豊川市.
Kawada, S. & Yokohata, Y. 2015. *Euroscaptor mizura* (Günther, 1880). *The Wild Mammals of Japan*, 2nd ed., pp.32-33. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
木村光伸・広瀬 鎮, 1982. 哺乳類. 犬山市史資料編二自然, pp.235-268. 犬山市, 愛知県犬山市.
子安和弘・織田銃一, 2009. ミズラモグラ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.68. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.

(子安和弘・織田銃一)

ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* Thomas

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いものの生息地域における密度は低く個体数も多くない上に 1970 年以降生息数が激減していると考えられている。県内では東三河と西三河の平野部に位置する 2 市で記録されているにすぎない。本種は県内の翼手類では唯一の純粋な森林性コウモリで、良好な環境を保った森林に高度に依存している。県内では生物多様性の高い森林の消滅や減少によって局地的に存在するにすぎず、本種の生息を保証する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危惧をもたらしていると考えられる。

【形態】

体重 35~60g、頭胴長 89~113mm、前腕長 57~66mm、尾長 51~67mm、脛骨長 21.5~27.0mm、後足長 (爪を含む) 13.0~15.5mm、耳介長 17.0~20.5mm、耳珠長 8~10mm、頭骨最大長 19.7~21.9mm。大型で毛色は体が赤褐色で皮膜は黒褐色。扁平で幅の広い脳頭蓋をもち、項稜が発達している。左右の項稜が出会う外後頭隆起の部分は上方に盛り上がっている。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd9~10=36~37 (子安・織田, 2009)。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市広久手町、豊田市 (京ヶ峰・市木町・東山町・越戸町・飯盛山: 子安ほか, 2001; 2008; 子安, 2018)、豊川市 (原田, 1998a, b) で確認されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐島、福江島、沖縄島での記録がある。

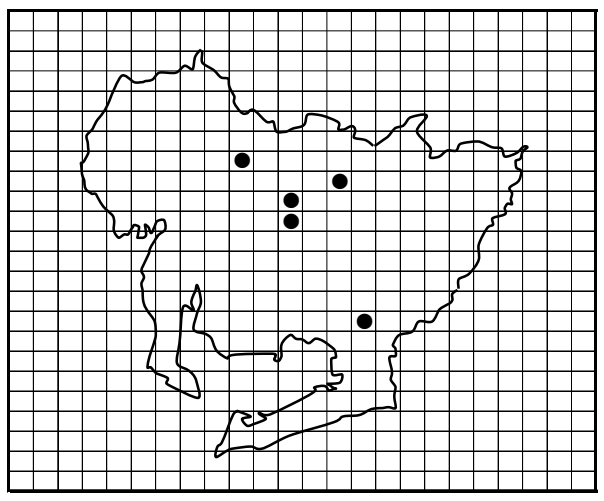
【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国東部 (Fukui, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

昼間は樹洞をめぐらして休息しており、日没後に出洞して採餌し、夜明け前に戻る。飛翔性昆虫を求めて夜中も飛翔し、森林の樹冠上や開けた場所で採餌している。1 頭が 1 晩に捕食する昆虫の量は 20g にも達する (前田, 1994)。餌を求めて長距離を高速で飛翔する。仔は生後 40~45 日で親と同じ大きさになって飛翔を開始する。雌は生後数ヶ月で性成熟して秋に交尾をおこない翌年の初夏に通常 2 仔、まれに 1 仔を産む。出産・育児をおこなう雌は大きな樹洞で 20~50 頭ほどの繁殖コロニーをつくる。雄はこの時期に 1 頭から十数頭の群をつくって樹洞や鳥の巣箱にすんでいる。寿命は 6 年以上 (子安・織田, 2009 など)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、しかも繁殖コロニーの形成を可能にする巨木の樹洞もきわめて稀である。したがって、現時点では県内に本種の繁殖コロニーが存在する可能性はきわめて低い。本種の減少の要因は伐採による原生林の縮小によって個体群の維持が困難になったことと繁殖コロニーを確立できる樹洞がほとんど失われていることである。

【保全上の留意点】

本種が県内で繁殖しているかについては不明であるが、その飛翔能力の大きさから採餌圏として県内が分布範囲に含まれていると考えられる。当面は原生林とその周辺の広葉樹林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林や人工樹洞の設置などを推進する必要がある。

【特記事項】

豊川市の記録は 1996 年 3 月 9 日に大崎の家屋内で死亡していたものであり (原田, 1998b)、豊田市の記録は京ヶ峰の豊田市自然観察の森 (1993 年 10 月 9 日; 2003 年 4 月 3 日)、越戸町上井畑 (2014 年 4 月 27 日) で観察されたものである (子安ほか, 2001; 子安ほか, 2008; 子安ほか, 2016)。

【引用文献】

原田猪津男, 1998a, b. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-本文-, pp.365-370(a). -資料-, pp.186-190(b). 豊川市, 豊川.
Fukui, D. 2015. *Nyctalus aviator* Thomas, 1911. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.76-79. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.

子安和弘・織田銃一, 2009. ヤマコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.69. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.

子安和弘・水野マリ子・佐竹義雄, 2008. 愛知県で生息が確認された 3 例目のヤマコウモリ. マンモス特別号, (10): 19-24.

子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.

(子安和弘・織田銃一)

チチブコウモリ *Barbastella darjelingensis* (Hodgson)

【選定理由】

国内では北海道と本州に分布することが知られている。北海道では多数の個体が捕獲されているが、本州ではごく少数の捕獲例しか知られていない (子安・織田, 2009 など)。愛知県では新城市玖老勢 (2006 年 12 月 10 日: 橋本 肇氏) と豊根村 (2007 年 2 月: 佐藤ほか, 2008) の記録があり (子安・織田, 2009)、東栄町でも確認されている (寺西, 2016)。

【形態】

左右の耳介の根元が頭頂部で接触するのが特徴で、前腕長 39~44mm、頭胴長 50~63mm、尾長 43~54mm、褐色系の体毛を持つ (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村富山 (佐藤ほか, 2008) と新城市玖老勢で知られていたが (子安・織田, 2009)、東栄町でも確認された (寺西, 2016)。

【国内の分布】

北海道 (国後島を含む)、岩手、福島、埼玉、東京、神奈川、静岡、長野、愛知、岐阜、愛媛、高知 (Fukui, 2015 など)。

【世界の分布】

日本 (北海道、本州、四国)、中国西部、ネパール、インド、アフガニスタン、イラン北部、パミールからコーカサス、シナイ半島、エリトリア、エジプト (Fukui, 2015 など)。

【生息地の環境／生態的特性】

岐阜県では、高山市高根町の野麦峠周辺原生林と人工林が混在している場所の樹洞での出産が 2007 年の 7~9 月に山本輝正氏らによって確認されている (朝日新聞 2008 年 5 月 11 日付岐阜全県版朝刊)。愛知県で生息が確認された豊根村では、2007 年 2 月 17 日に富山のトンネル (周囲の植生は低木層に多様な広葉樹が見られるスギ人工林) 内で冬眠中の雌雄不明 2 個体を確認したものである (佐藤ほか, 2008)。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊根村富山地域での冬眠個体の発見 (佐藤ほか, 2008) は、愛知県内における本種の生息と越冬洞の存在をあきらかにしたものと見えよう。しかしながら、県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、しかも繁殖コロニーの形成を可能にする巨木の樹洞もきわめて稀である。したがって、現時点では県内において本種の繁殖コロニーが発見される可能性は低いといわざるをえない。本種の減少の要因は伐採による原生林の縮小によって採餌場所が喪失されて個体群の維持が困難になったこと、繁殖コロニーを確立できる樹洞がほとんど失われたことである。

【保全上の留意点】

本種が県内で繁殖しているかについては不明であるが、その飛行能力の大きさから採餌圏として県内が本種の分布範囲に含まれているのは確実である。当面は原生林とその周辺の広葉樹林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林や人工樹洞の設置などを推進する必要がある。

【特記事項】

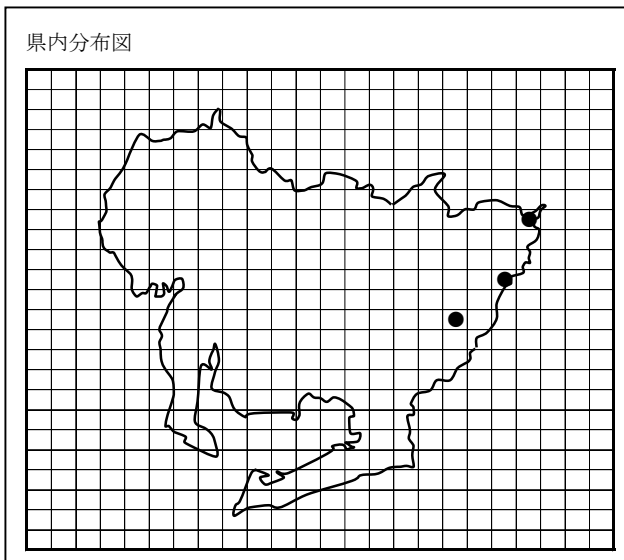
2007 年 2 月 17 日に富山のトンネル (隧道) で発見された冬眠中の 2 頭のうち、1 頭は隧道の壁面に直接しがみついていたが、1 頭は壁面の裂隙内に潜んで冬眠していたという (佐藤ほか, 2008)。東栄町の個体は橋本肇氏によって 2008 年 1 月に確認されたものである (寺西, 2016)。

【引用文献】

- 子安和弘・織田銃一, 2009. チチブコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.70. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
Fukui, D. 2015. *Barbastella darjelingensis* (Hodgson, 1855). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.88-89. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録. マンモス特別号, (10): 25-28.
寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊)。

(子安和弘・織田銃一)

県内分布図



ノレンコウモリ *Myotis bombinus* Thomas

【選定理由】

国内では北海道、本州、四国、九州、口永良部島に分布する洞穴性のコウモリである。中部圏で生息することが発見されたのも近年のことであり、愛知県でも2006年11月に最初の3個体が発見された(佐藤ほか, 2008)。県内を含む中部圏での発見個体数も少なく、愛知県に隣接した静岡県天竜川水系で小規模な繁殖個体群が発見されているのみである(佐藤ほか, 2008)。

【形態】

体重 5~8g、頭胴長 43.1~55.0mm、前腕長 38~42mm、尾長 39~48mm、脛骨長 15.7~17.0mm、後足長(爪を含む) 10.2~11.5mm、耳介長 15.1~18.1mm、頭骨最大長 14.4~15.3mm。中型種。飛膜は外側趾の基部につき、腿間膜の後縁に細毛が列生する。耳珠は耳介の1/2以上の長さになる。歯式は I2/3, C1/1, P3/3, M3/3=38、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd9=36 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

天竜川水系の2009年までに設楽町清崎(橋本肇氏)、豊根村と東栄町(佐藤ほか, 2008)で知られていた(子安・織田, 2009)。2006年以降、新城市でも確認された(寺西, 2016)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、国後島、口永良部島(Sano, 2015)。

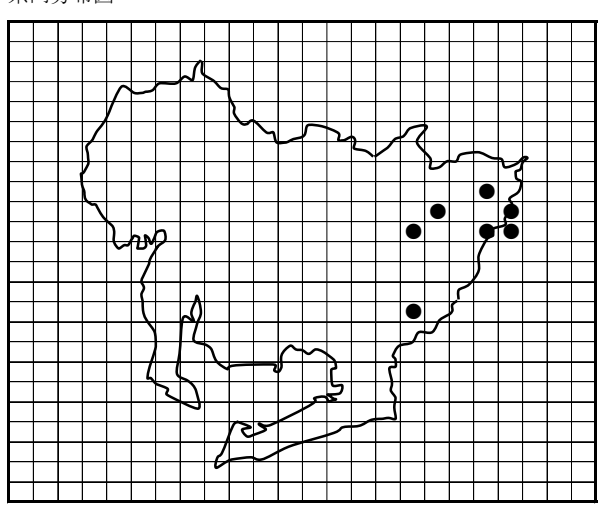
【世界の分布】

日本から朝鮮半島、シベリア南東部、中国東北部(Sano, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

洞穴(人工洞・隧道を含む)をねぐらとし、時に家屋を利用する(佐藤ほか, 2008)。少数個体で見られることが多いが、50~100個体の哺育集団をつくることもある。小型の蝶、甲虫、ハエなどの昆虫やクモなどを捕食する。初夏に1仔を産む。雌の多くは生後満1年で出産を始め、7歳まで毎年出産し、一部は10年以上生きる(Funakoshi, 1991)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

2009年まで、愛知県では繁殖コロニーが発見されていなかった(子安・織田, 2009)。静岡県の天竜川水系で確認された出産哺育のねぐら(標高500mの車両用トンネル)では、2007年7月8日~22日の間に幼体3個体とそれを哺育する成体3個体が観察されている(佐藤ほか, 2008)。減少の要因は、餌となる昆虫を含む森林環境の破壊、ねぐらとなる洞穴・隧道の破壊などがあげられる。

【保全上の留意点】

2006年3月から2008年2月まで、愛知県、静岡県、長野県の3県が隣接する地域でノレンコウモリの周年動態を調査した結果によると、天竜川水系の8地点(標高200~650m)と大井川水系の7地点(標高500~700m)、計15地点の車両用トンネルで延べ124個体を観察し、そのうちの8個体が哺育中の幼体であったという(佐藤ほか, 2008)。このように、本種の生息と繁殖にかかわるトンネルの役割が大きいため、その周囲を含む環境の保全とモニタリングに留意する必要がある。

【特記事項】

2006年以降、設楽町、東栄町、豊根村、新城市において橋本肇氏によって生息が確認されている(寺西, 2016)。

【引用文献】

- Funakoshi, 1991. Reproductive ecology and social dynamics in nursery colonies of the Natterer's bat *Myotis nattereri bombinus*. J. Mammal. Soc. Japan, 15: 61-71.
子安和弘・織田銃一, 2009. ノレンコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.71. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
Sano, A. 2015. *Myotis bombinus* Thomas, 1906. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.110-111. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* の出産哺育と周年動態. コウモリ通信, 16 (1): 2-9.
寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊). (子安和弘・織田銃一)

コテングコウモリ *Murina ussuriensis* Ognev

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、愛知県では設楽町と豊根村における 3 地点での 4 個体が確実な生息記録である。森林性コウモリで、木の茂みで休息しているのが観察されている。県内では生物多様性の高い森林が局地的にしか存在していないので、本種の生息を保証する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危機をもたらしていると考えられる。

【形態】

体重 3.5~6.5g、頭胴長 38~54mm、前腕長 28.4~33.0mm、尾長 26~33mm、脛骨長 12~16mm、後足長(爪を含む) 7.0~10.5mm、耳介長 12~17mm、耳珠長 7.2~9.0mm、頭骨最大長 14.6~16.0mm。小型で、背面の毛色は黄土色から淡赤褐色。耳介は卵形で耳珠は細長い。腿間膜は上面の全面が毛で被われ(前田, 1994)、尾端が 1mm ほど腿間膜の外に突出する。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34 (子安・織田, 2009 など)。脊柱式は調べられていない。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町(原田, 1998)と豊根村(橋本 肇氏)から知られていた(子安・織田, 2009)。その後、瀬戸市、豊田市、岡崎市、東栄町でも確認された(寺西, 2016 ; 子安, 2018)。

【国内の分布】

国後島(Tiunov, 1997)、北海道、本州、四国、九州、奄岐、対馬、屋久島で記録されている(Kawai, 2015)。

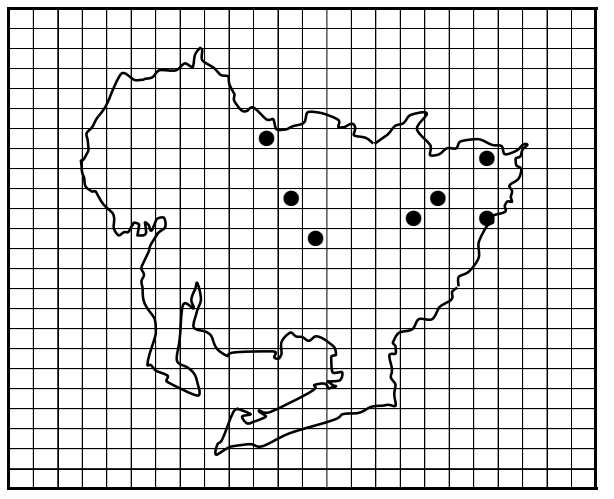
【世界の分布】

日本、サハリン、シベリア沿海地方、朝鮮半島に分布する(Kawai, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

昼間は木の茂みの間や樹洞の中で休息しているが、たいていは単独で見つかっている。日没後ねぐらから出て採餌し、夜明け前に戻る。夜間に飛翔性昆虫を捕食するが、葉上に静止している昆虫も食べているらしい(前田, 1994)。初夏に 1~2 頭の仔を出産するという。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、森林性コウモリがねぐらとして利用できる樹洞のある巨木も少ない。森林の伐採や単一樹種の植林が本種の採餌場所の環境悪化をもたらし、個体群の維持を困難にさせている。

【保全上の留意点】

生物多様性の高い森林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林やバットハウス(コウモリ用巣箱)・人工樹洞の設置などを推進する必要がある。また、生物相調査の際には森林性コウモリの生息可能性を常に考慮し、コウモリ類の生息状況を正確に把握するようにつとめなければならない。本種は人工建造物に住みつくことがあるので、より有効なコウモリ用巣箱を取り付けるなど保護施設の開発を進めることによって保護の成果が期待できるとされている(向山, 2000)。

【特記事項】

Yoshiyuki は 1983 年に日本産のコテングコウモリが固有種であると考えて *Murina silvatica* という学名を与え、和名をニホンコテングコウモリとしている(Yoshiyuki, 1989)。*Murina silvatica* は IUCN2003 のレッドリストでは LR/nt (準絶滅危惧) のランクが与えられている。日本哺乳類学会では希少種とされている(前田・松村, 1997)。

【引用文献】

- 原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-資料-, pp.186-190. 豊川市, 愛知県豊川市.
Kawai, K. 2015. *Murina ussuriensis* Ognev, 1913. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.123-125. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 愛知県豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. コテングコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.71. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
前田喜四雄, 1994. コウモリ目(翼手類). 日本の哺乳類, pp.37-70. 東海大学出版会, 東京.
前田喜四雄・松村澄子, 1997. 翼手目 CHIROPTERA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.31-55. 文一総合出版, 東京.
向山 満, 2000. ニホンコテングコウモリ. 青森県の希少な野生生物, p.111. 青森県環境生活部自然保護課, 青森.
寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録(自刊).
Tiunov, M.P., 1997. [Chiroptera of the Far East], 134pp. Dalbnauka, Vladivostok.
Yoshiyuki, M., 1989. A systematic Study of the Japanese Chiroptera, 242pp. National Science Museum, Tokyo.
(子安和弘・織田銃一)

ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G.Cuvier

【選定理由】

かつては本州、四国、九州に広く分布していたが、九州では絶滅した可能性が高く、四国でも絶滅寸前の状態である(阿部,2000)。本州でも、下北半島、紀伊半島、東中国地域、西中国地域の各地域で絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている(子安・織田, 2009 など)。県内では定住個体はないと考えられていた(宮尾ほか, 1984)。近年県外からの越境個体のほかに子連れの雌も目撃され、ごくわずかな数の繁殖・出産を伴う定住個体が存在すると考えられる。

【形態】

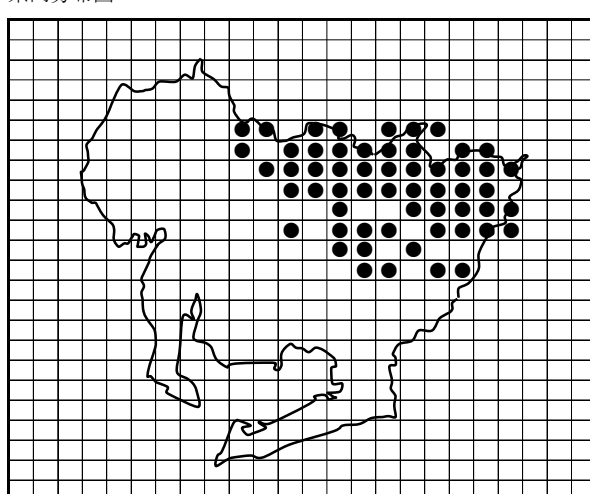
体重 55.0~187.5kg、頭胴長 1200~1630mm、尾長 80mm 前後、後足長(爪を含む) 210mm 前後、耳介長 90mm 前後、頭骨最大長 189.0~265.2mm。ヒグマより小型で、全身黒色の毛で被われているが、前胸部に白色の月の輪の模様がある。頭蓋では脳頭蓋部が比較的大きく、吻は短い。眼窩前下端から頬歯列に垂線をおろした場合、この線は第 1 大臼歯の後部を通る。乳頭式は 2+0+1=6。歯式は I3/3,C1/1,P4/4,M2/3=42 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市足助地域(1945年頃)、豊田市川面町(旧足助町)(1977年)、豊根村(1944年)、東栄町(1963年)での記録がある(宮尾ほか, 1984)。2001年には豊田市旭地域と足助地域で別個体の目撃例(2件3個体)があった。2002年5月7日豊田市稲橋(旧稲武町)で再発見・射殺された。近年の目撃は、瀬戸市、豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市。分布図は必ずしも定住を示さない。

県内分布図



【国内の分布】

本州、四国、九州で記録されており、九州では絶滅したと考えられる(Yamazaki, 2015)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、ロシア沿海地方、中国、台湾、海南島、インドシナ北部、チベット、ネパール、イランまで(Yamazaki, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

中部地方ではブナ林などの冷温帯落葉広葉樹林が主要な生息地環境であるが、県内では面ノ木(豊田市稲武地域)、段戸裏谷(設楽町)などごく限られた面積しか残されていない。越冬場所としてブナなど大木の樹洞や岩穴などを利用し、冬眠中に1~2頭の仔を出産する(子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

1963~1977年の間に4件5頭の捕獲記録・死体発見記録があったが(宮尾ほか, 1984)、1970年代に報告された冬眠例や目撃談や目撃情報以降、2001年まで生息記録が絶えていた。2001年の目撃例後、毎年相当数の目撃例がある(子安・織田, 2009 など)。減少の要因は森林の伐採・単一種の植林などが考えられる。近年の目撃例の中には子グマの目撃例が複数含まれており、県外からの子連れクマの移入や県内での出産が考えられる。

【保全上の留意点】

2001年以降、県内での「生息」が確認されている。まだ安定した個体群の存在ではないが、愛知県におけるツキノワグマの復活を前提とした「心構え」が必要とされている。また、調査、研究、広報のほかに、ツキノワグマが生息可能な森林を回復する努力を早急におこない、ツキノワグマと人との遭遇事故を起こさないようにする必要がある。

【特記事項】

種の保存法による国際希少野生動物種。1963年に東栄町足込で捕獲されたツキノワグマの標本は田口中学校に保管されており(原田, 1968)、1977年に豊田市足助地域川面で死体が発見された個体の剥製標本は愛知学院大学歯科資料展示室で展示されている。化石は、栃木県の中期・後期更新世、青森県の中期更新世後期、各地の考古学的遺跡などから出土している(Yamazaki, 2015)。

【引用文献】

阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津夫, 1968. 哺乳類. 北設楽郡史 原始~中世, pp.54-56.
子安和弘・織田銃一, 2009. ツキノワグマ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.73. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
Yamazaki, K. 2015. *Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.243-245. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

(子安和弘・織田銃一)

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters)

【選定理由】

本種は、IUCN2003 のレッドリストでは LR/nt (準絶滅危惧) に指定されている (ただし、当時の学名 *Vespertilio superans* として)。国内では北海道、本州、四国、九州にかけて分布する樹洞性あるいは家屋性のコウモリである。愛知県では、2002 年 5 月に設楽町東納庫で最初の個体が発見され (川田, 2004)、2003 年 7 月に安城市日の出町で繁殖集団の雌と幼体が (小鹿・子安, 2007)、越冬集団が設楽町東納庫 (城ヶ原ほか, 2007) と豊根村富山 (佐藤ほか, 2008) で発見されているが、安定した繁殖集団は確認されていない (子安・織田, 2009)。

【形態】

体重 14~30g、頭胴長 60.8~80.0mm、前腕長 47~54mm、尾長 35~50mm、脛骨長 17.3~19.1mm、後足長 (爪を含む) 9.8~11.2mm、耳介長 16.2~19.2mm、頭骨最大長 16.5~17.4mm。耳介は幅広く、先端が丸い、ほぼ三角形で、耳珠も短く先端がやや広く丸い。飛膜は足の外側中央か外側趾の基部付近につく。踵骨には後葉がある。歯式は I2/3, C1/1, P1/2, M3/3=32、乳歯式は dI2/3, dC1/1, dP2/2=22 で、上顎第三乳臼歯は交換しない (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

2002 年 5 月 25 日、設楽町東納庫大桑の製材所において最初の雌 1 個体が発見された (川田, 2004)。その後、愛知県では十数頭の越冬個体群 (設楽町東納庫：城ヶ原ほか, 2007)、越冬する 1 個体 (豊根村富山：佐藤ほか, 2008)、100 個体ほどの出産・哺育集団 (安城市日の出町：小鹿・子安, 2007) が記録された (子安・織田, 2009)。その後、名古屋市中区 (野呂, 2017)、豊田市岩倉町 (子安, 2018)、岡崎市石原町 (2019 年 6 月 24 日：戸田, 印刷中)、東栄町小林大平 (2014 年 5 月 7 日) で確認された。

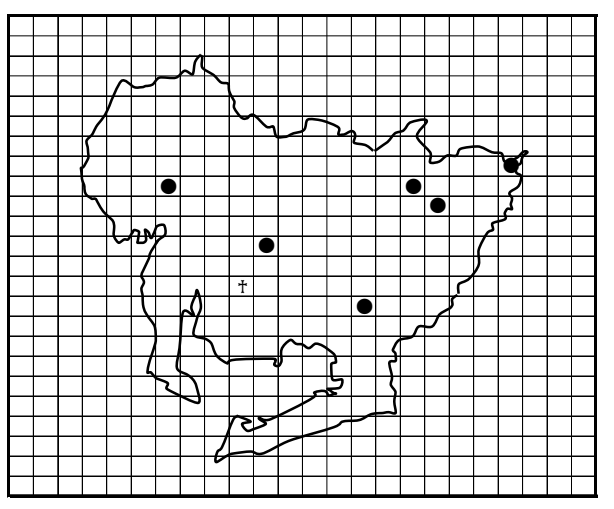
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、萩諸島、大机島 (子安・織田, 2009 ; Fukui, 2015)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル、シベリア沿海地方 (Fukui, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林高木の樹洞、家屋、洞穴を利用する。雌は 100 頭をこえる出産・保育集団を形成し、初夏に通常 2 仔を産む。出生した雌はその年の秋に成熟し、満 1 歳で出産する (子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

2002 年 5 月に設楽町で最初の個体が発見されて以来、出産・哺育集団を含めて 3 地点 4 回の生息確認がなされている。出産の際に雌の巨大な集団が形成されることから、本種が集団で移動することが示唆されている (浦野ほか, 2008)。安城市日の出町 (小鹿・子安, 2007) や大阪府堺市 (浦野ほか, 2008) の出産・哺育集団は哺育終了前に民家から放逐されている。

【保全上の留意点】

近年、都市部でのヒナコウモリ観察例が増えており、都市部での繁殖集団に対する住民の追い出しも増えると予想される (子安・織田, 2009)。ヒナコウモリの保全に対する意識の向上が求められる。

【特記事項】

豊田市岩倉町では 2008 年 4 月 6 日に杉山時雄氏によって撮影され (子安, 2018)、岡崎市石原町の本宮山では 2019 年 6 月 24 日に樹皮と樹幹の間で休息する個体が戸田尚希氏によって撮影された (戸田, 印刷中：口絵参照)。化石は本州西部の後期更新世から産出している (Fukui, 2015)。

【引用文献】

Fukui, D. 2015. *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.96-98. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

城ヶ原貴通・森部絢嗣・織田銃一, 2007. 愛知県設楽町におけるヒナコウモリ越冬個体群. マンモ・ス特別号, (9): 23-24.

川田伸一郎, 2004. 愛知県で記録された特筆すべき小哺乳類 2 種. マンモ・ス特別号, (6): 3-5.

子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 愛知県豊田市, 豊田.

子安和弘・織田銃一, 2009. ヒナコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.75. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

野呂達哉, 2017. 名古屋市におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880) の初記録. なごやの生物多様性, 4: 109-112.

小鹿登美・子安和弘, 2007. 愛知県安城市におけるヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (9): 17-22.

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正, 2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録. マンモ・ス特別号, (10): 25-28.

戸田尚希, 印刷中. ヒナコウモリを三河本宮山にて確認. 三河生物, (12).

浦野信孝・米道纈夫・山本浩平, 2008. 新たに発見されたヒナコウモリのコロニー. コウモリ通信, 16 (1): 19-20.

(子安和弘・織田銃一)

テングコウモリ *Murina hilgendorfi* (Peters)

【選定理由】

本種はアジア東部に生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、県内では東三河山間部の 3 市町で記録されているにすぎない。洞穴内でみつかると樹冠や樹洞もねぐらにする半森林性コウモリである。県内では生物多様性の高い森林が消滅や減少によって局地的に存在するにすぎず、本種の生息を保障する良好な環境の不足が本種の個体群に絶滅の危惧をもたらすと考えられる。

【形態】

体重 9~15g、頭胴長 57.9~73.0mm、前腕長 41~46mm、尾長 36~47mm、脛骨長 16.9~19.9mm、後足長 (爪を含む) 11.4~13.6mm、耳介長 16.8~18.4mm、耳珠長 7.0~8.5mm、頭骨最大長 18.8~20.9mm。大型のコウモリで、背面の毛色は灰褐色。銀色の刺し毛が霜降り状に体毛に混ざる。耳介は卵形で耳珠が細長い。腿間膜の上面は全体が長毛で被われている。歯式は I2/3, C1/1, P2/2, M3/3=34、脊柱式は C7+T10+L5+S5+Cd8~9=35~36 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

2009 年までに、設楽町 (橋本 肇氏)、東栄町 (寺西, 2002)、新城市 (松井ほか, 1995) で確認されていた (子安・織田, 2009)。その後、犬山市、瀬戸市、豊根村、東栄町、新城市で確認され (以上は寺西, 2016)、豊田市百月町でも確認された (子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

【国内の分布】

国後島、北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、サハリン、シベリア沿海地方、朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期は主に樹冠をねぐらとし、冬期には定まった樹洞や洞穴で単独ないし数頭で見つかることが多い。日没後ねぐらから出て採餌し、夜明け前に戻る。飛翔性昆虫を森林の下層部で捕食するが、地上での採餌も示唆されている (向山, 2000)。出産は 7 月で、1~3 頭の仔を産むと考えられている (Kawai, 2015)。天竜川水系のトンネルでは出産・哺育集団が確認され、この集団では、5 月から 7 月まで継続して群塊を形成し、7 月には 14 頭中 6 頭の幼獣を含む哺育集団であった (佐藤・勝田, 2007)。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内には生物多様性の高い森林が限局的にしか存在せず、ねぐらとなる樹洞のある巨木もきわめて稀である。森林の伐採や単一樹種の植林が本種の採餌場所の環境悪化をもたらす個体群の維持を困難にさせている。また、洞穴の封鎖や洞穴内の環境悪化も個体数の減少要因となっている。

【保全上の留意点】

生物多様性の高い森林の保全に努めるとともに、生物多様性を高めるような植林やバットハウス (コウモリ用巣箱)・人工樹洞の設置などを推進する必要がある。また、生物相調査の際には森林性コウモリの生息可能性を常に考慮し、コウモリ類の生息状況を正確に把握するようにつとめなければならない。さらに、天然洞穴や人工洞穴に入洞規制のための柵を設置する場合にはコウモリの出入りを妨げないような設備が必要である。

【特記事項】

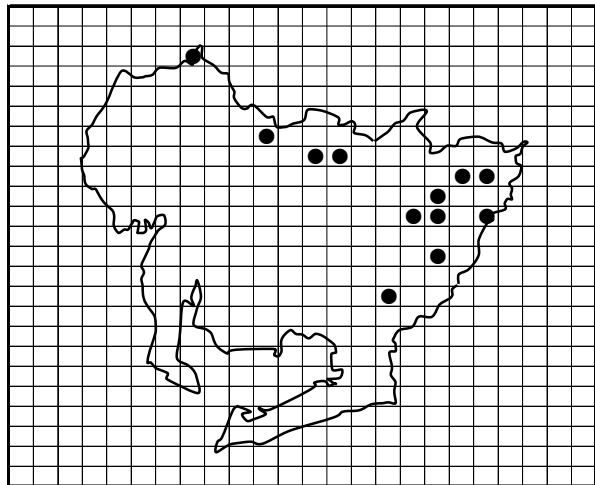
設楽町、東栄町、豊根村、新城市での生息は、橋本肇氏によって確認されたものである (寺西, 2016)。

【引用文献】

- Kawai, K. 2015. *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.117-119. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別冊自然, pp.586-603. 愛知県豊田市, 豊田.
- 子安和弘・織田銃一, 2009. テングコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.76. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- 子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
- 松井 保ほか, 1995. 哺乳類. 鳳来町誌歴史編, pp.32-35. 鳳来町, 愛知県南設楽郡鳳来町.
- 向山 満, 2000. ニホンテングコウモリ. 青森県の希少な野生生物, p.112. 青森県環境生活部自然保護課, 青森.
- 佐藤顕義・勝田節子, 2007. 天竜川水系で確認したテングコウモリ *Murina leucogaster* の繁殖と周年動態, コウモリ通信, 15, 1, 2-5.
- 寺西敏夫, 2002. 愛知県のコウモリ: アブラコウモリを除く (1998~2002, 1). マンモス特別号, (4): 3-13.
- 寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊).

(子安和弘・織田銃一)

県内分布図



ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson)

【選定理由】

愛知県内では 2017 年 2 月に豊田市の高橋地区の排水路で越冬中の個体が発見されている (岡田, 2017; 子安, 2018)。豊田市では、最初の発見以後もその排水路や近辺で何度か目撃がなされており、県内での生息が確実となった。2017 年の発見までの生息記録も乏しく、県内ではその生息数もごく限られていると考えられるため「絶滅危惧 I B 類」に選定した。

【形態】

前腕長 45~51mm、頭胴長 59~69mm、尾長 51~57mm、体重 10~17g。耳介や耳珠は比較的短く、体毛は黒褐色で狭長型の翼をもつ。手の第 3 指の第 2 指骨は非常に長くて第 1 指骨の約 3 倍の長さがある (阿部ほか, 2005 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市矢並町、設楽町、東栄町 (寺西, 2016; 岡田, 2017; 子安, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州、佐渡島、伊豆大島、対馬、隠岐、福江島、屋久島 (Sano, 2015)。

【世界の分布】

日本、ロシア沿海地域、朝鮮半島、中国、インドからアフガニスタン (Sano, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

ユビナガコウモリは洞窟性で、温帯では 1~2 万頭のコロニーを形成することがある。出産哺育期には雌雄は分離し、成雌は幼獣と哺育集団をつくる。幼獣が独立生活にはいると、雌雄混成の交尾集団と一時的な亜成獣・幼獣集団が形成され、冬期には両性混合の集団になる。小・中型のチョウ目昆虫が主要な餌で、雌は秋に交尾し、受精卵をもって冬眠し、初夏に 1 仔を産む。仔は 16 カ月で性成熟する (阿部ほか, 2005 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

2017 年 2 月に豊田市矢並町において生息が確認されて以来、その近辺で何度か目撃されている (子安, 2018)。確認されている時期が冬眠をおこなっている冬季のみであり、それ以外の季節における生息状況は不明。愛知県での生息数は決して多くはないと推測される。発見数が少ない原因として、ある程度の生息規模をもつ越冬洞が未発見である可能性も否定はできない。

【保全上の留意点】

京都府では 2010 年にはじめて発見された (前田, 2015)。京都府では、生息洞穴の減少や消滅などによる生息環境の悪化が個体数を激減させていることの要因とされ (前田, 2015)、愛知県でも生息洞穴の減少や消滅、生息地の攪乱を防ぐことが保全上の留意点として重要である。日本列島における本種の大規模な繁殖地は 6 箇所のみが知られており (前田, 2009)、愛知県の個体群は距離から判断すると新潟県柏崎市と和歌山県白浜町の 2 つの繁殖集団のどちらかに由来する可能性が高い。

【特記事項】

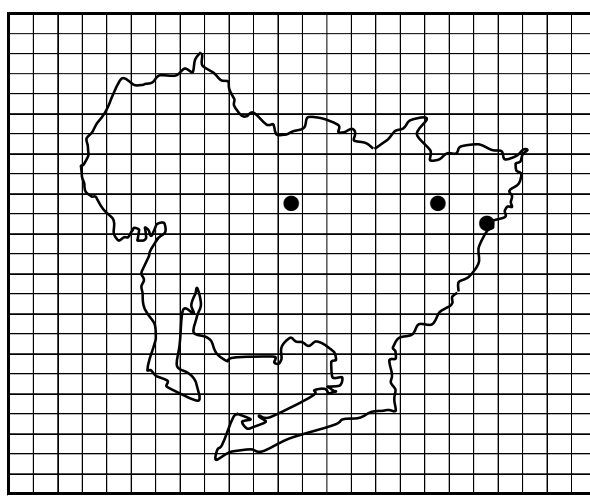
豊田市矢並町のコンクリート製地下水路で発見された 1 個体は、1 個体のモモジロコウモリと同時に発見されており、写真によってユビナガコウモリと判定されている (岡田, 2017)。設楽町と東栄町では橋本肇氏によって非越冬個体の確認がなされている (寺西, 2016)。

【引用文献】

- 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 2005. 日本の哺乳類, 改訂 2 版, 206pp. 東海大学出版会, 神奈川県秦野市.
- 子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 愛知県豊田市, 豊田.
- 寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊).
- 前田喜四雄, 2009. 日本列島におけるユビナガコウモリの個体数推定. 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要, 10: 31-37.
- 前田喜四雄, 2015. ユビナガコウモリ. 京都府レッドデータブック 2015, 京都府環境部自然環境保全課, 京都市.
- 岡田慶範, 2017. 豊田哺乳類研究会会報 2017.3.8. 豊田哺乳類研究会会報, (94): 1, 豊田哺乳類研究会.
- Sano, A. 2015. *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835). The wild mammals of Japan, 2nd ed., pp.126-127. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

(子安和弘)

県内分布図



ニホンモモンガ *Pteromys momonga* Temminck

【選定理由】

本種は県内で著しく個体数を減少させていると考えられている(子安・織田, 2009)。本種は森林環境に依存して生活しており、自然林の縮小、個体群の分断、環境悪化が個体数を減少させ、その結果として絶滅のおそれがある。

【形態】

頭胴長 139~195mm、尾長 95~140mm、後足長 31.5~39.0mm、耳介長 14.5~25.0mm、頭骨最大長 38.3~42.2mm。ムササビに似ているがはるかに小さい。夜行性で眼が大きい。前肢の手根部から後肢の膝にかけて飛膜を持ち、滑空することができる。切歯孔は短く、上顎頬歯列長は通常 7mm 以上。短くねじれた陰茎骨をもつ。乳頭式は 2+2+1=10 で、近縁種のタイリクモモンガより腹部の乳頭が 1 対多い。歯式は I1/1, C0/0, P2/1, M3/3=22 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村、東栄町、豊橋市(子安・織田, 2009; 杉山, 2012; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州にのみ分布(Oshida, 2015)。

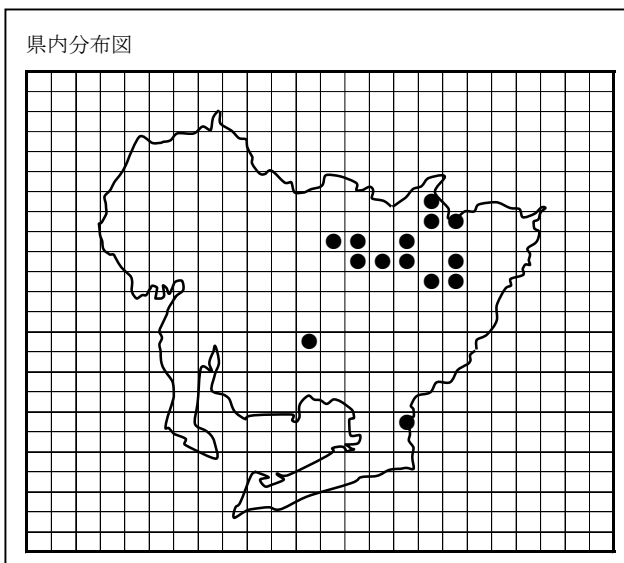
【世界の分布】

日本固有種(Oshida, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

亜高山帯以下の山地帯森林に生息し、夜行性、樹上性で、樹上に小枝と樹皮の線維で球状の巣をつくるほか、キツツキの古巣などの樹洞もよく利用する。生息する樹洞では、穴の真下の枝の分岐部などに直径 5mm 程度の黒い糞が集中して落ちている。鳥の巣箱にはいつているのがみつかるともしばしばある。樹木の葉、芽、樹皮、種子、果実、キノコなどを食べる。春から秋にかけて 1~2 回繁殖し、1 回に 2~6 仔を産む。ムササビ同様、皮膜を使った滑空で樹間を移動する。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内では三河地域での生息が認められているにすぎない。夜行性で目撃されにくいという性質があるにしても、記録の少なさは個体数の減少を反映していると考えられる。大木の樹洞に営巣するなど森林に依存した生活を送っているため、天然林の減少や森林内での道路建設が個体群の分断や生活環境の悪化にともなう個体数の減少をもたらしていると考えられる。

【保全上の留意点】

ニホンモモンガの分布域では生息個体群を分断する道路・ダム湖の造成や森林の無秩序な伐採・開発を避けるべきで、やむを得ない場合にも「緑の回廊」の設置や、失われる分布面積に匹敵する代替環境造成により潜在植生の復元をはかるなど、個体群の分断化の影響を減らす必要がある。

【特記事項】

夏毛では背面の毛色が褐色から灰色まで中間色を介して変異に富む。愛知県では奥三河郷土館(設楽町)や石巻自然科学資料館(豊橋市)に展示標本があったものの、退色のため毛色は不明である。岡崎市才栗町の分布は小鹿登美氏のご教示による。豊田市怒田町では複数個体が生息していたスギの巣穴が伐採で失われた(杉山, 2012)。本州南部の中期・後期更新世と完新世から化石が産出している(Oshida, 2015)。

【引用文献】

- 子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. ホンドモモンガ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.74. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
Oshida, T. 2015. *Pteromys momonga* Temminck, 1844. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.202-203. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
杉山時雄, 2012. 愛知県におけるモモンガの記録. 三河生物, 4: 57-58.

(子安和弘・織田銃一)

カワネズミ *Chimarrogale platycephalus* (Temminck)

【選定理由】

本州と九州に広く分布し、県内でも 5 市町で生息が認められているが、半水生哺乳類である本種は溪流や小河川に依存して生活しており、生物多様性に配慮しない護岸工事や生活排水の流入など本種の生息環境の悪化によって個体群の維持が困難になっていると考えられる。

【形態】

体重 24~56g、頭胴長 94~144mm、尾長 87~113mm、後足長 23.0~27.7mm、耳介長 6.2~11.0mm、頭骨最大長 25.8~28.2mm。水生に適応した大型のトガリネズミで、前肢・後肢の指の間にある剛毛が水中で水かきの役割をはたしている。頭骨の脳頭蓋は扁平で口吻前方に尖っている。歯の咬頭の先端には赤い着色がない。歯式は通常 I3/1, C1/1, P1/1, M3/3=28 とされている(子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、豊田市、みよし市、岡崎市、設楽町(原田, 1996a, b; 子安・織田, 2009)。

【国内の分布】

本州(千葉を除く 33 都府県)と九州(全 7 県: Abe *et al.*, 2015)。四国では後期更新世以降絶滅したと考えられる(子安, 1998)。

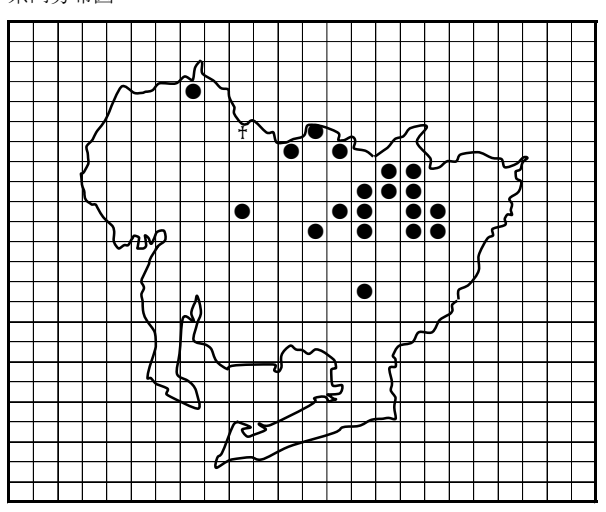
【世界の分布】

日本固有種(Abe *et al.*, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

山間部の溪流と丘陵部の小河川に生息する。巧みに水泳・潜水してトビケラの幼虫のような水生昆虫、サワガニ、魚類、カエルなどを捕食する。繁殖期は春と秋で、1 回に 2~5 仔を産む。巣は河畔の土中や石の下につくる。3 年以上生息する個体もいる。山間部の養魚場で飼育されている溪流魚をねらって出没することもある。水中を泳ぐ際には体表を被う毛皮の間に空気の泡を含み、これが光を反射するので「銀の矢」が水中を駆け抜けていくように見える。小河川を中心に存在するホームレンジ内では定期的に上流と下流に向かって移動を繰り返しているが、淵への落ち込みが急な箇所では岸に上陸して急流を迂回する性質がある。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

現時点でカワネズミの生息することに疑問がない愛知県の河川は、矢作川水系(名倉川・神越川・巴川・乙川・男川など)と豊川水系(源流部)の 2 水系にすぎない。水生動物の生息に配慮しない護岸工事や河川改修はカワネズミの生息を不可能にしており、また生活排水の流入などによる河川の汚濁もカワネズミの絶滅域を拡大することによって個体数を減少させている。

【保全上の留意点】

里山に近い山間部での小河川や溪流における河川改修・護岸工事・農薬散布に際してはカワネズミの生息可能性を念頭に置いた施工が必要である。カワネズミそのものに対する知識不足(例えばカワネズミは「ネズミ」の属する齧歯目ではなく食虫目に属することなど)や半水生哺乳類としての生態特性から、各河川での生息が知られることなく絶滅する可能性があるため注意が必要である。

【特記事項】

天明年間(1781~1789)に成立した内藤東甫の『張州雑誌』にカワネズミの図がある。「水野沓掛邊(現在の瀬戸市定光寺町近辺)谷川處々有...」という記述から、最近の記録に乏しい尾張平野丘陵部にも 18 世紀後半にはカワネズミが少なからず生息していたが、瀬戸市では絶滅した可能性がある(子安・織田, 2009)。山口県の中期更新世、広島県の後期更新世、滋賀県の完新世、愛媛県の後期更新世から化石が産出している(Abe *et al.*, 2015)。

【引用文献】

Abe, H., Saito, H., Motokawa, M. 2015. *Chimarrogale platycephalus* (Temminck, 1842). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.16-18. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史・自然・資料編, pp.377-380. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.

原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』『資料編』, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.

子安和弘, 1998. 日本産トガリネズミ亜科の自然史. 食虫類の自然史, pp.201-267. 比婆科学教育振興会, 広島県庄原市.

子安和弘・織田銃一, 2009. カワネズミ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.78. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

(子安和弘・織田銃一)

アズマモグラ *Mogera imaizumii* (Kuroda)

【選定理由】

国内では本州中部以北で連続した分布を示すが、中部以南では不連続で孤立した個体群となっている。県内では1984年まで生息が知られていなかったが、最近の発見は以前考えられていたより広い地域で発見されることを示している。しかし、本県の分布域は本州北部個体群の最南端にあり、特に平地や丘陵地の小個体群は孤立していて、こうした小個体群は絶滅する危険性が高い。

【形態】

体重48.0~127.0g、頭胴長121.0~159.0mm、尾長14.0~22.0mm、後足長15.5~22.5mm、頭骨最大長31.5~38.5mm。小型~中型のモグラであるが、体の大きさの地理的変異が著しい。愛知県内のアズマモグラは小型である。頭骨は吻部が比較的狭く、眼窩部の膨らみが大きい。上顎の切歯列はV字型かU字型をしており、円弧状の配列を示すコウベモグラと異なる。歯式はI3/2,C1/1,P4/4,M3/3=42、脊柱式はC7+T14~15+L4~5+S6+Cd11~12=44(子安・織田, 2009など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、瀬戸市、美浜町、豊田市、設楽町、豊根村、新城市、豊川市(原田, 1996; 1998; 愛知県商工部万博誘致対策局, 1996; 川田・姫田, 2001; 子安ほか, 2001; 子安, 2007; 子安・織田, 2009; 河辺ほか, 2018)。岡崎市でも生息の可能性がある(子安, 2014)。

【国内の分布】

本州、四国、粟島、能登島、小豆島。

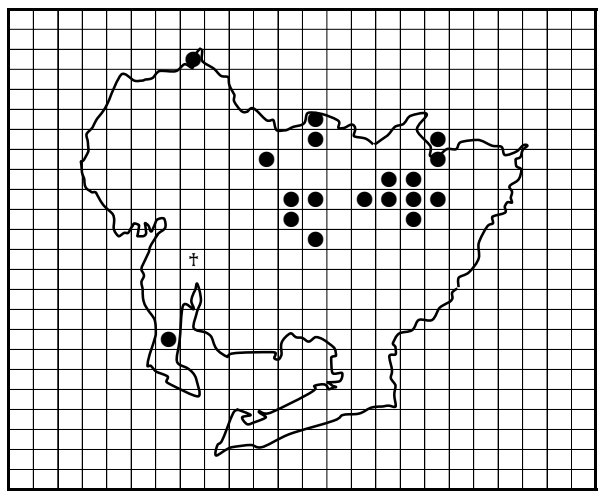
【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

国内の主要な分布地である本州中部以北では、低地から低山帯の平野部の草地、耕地、森林などに多く、高標高地の草原にも生息する。愛知県内では、山地ないし丘陵地の土壌の発達の悪い場所に生息しているが(子安ほか, 2001)、山地のゴルフ場内でコウベモグラと微妙なすみ分けをしている場所もある(川田・姫田, 2001)。餌としてはミミズ類と昆虫類が多い。春に主要な繁殖期があり1回に2~6仔を産む。寿命は3年あまり。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

県内では8市町村の14地点で確認されているにすぎない。奥三河の豊根村、豊田市稲武地域、設楽町、新城市鳳来地域では分布が連続している可能性があるが、他の丘陵地や平地の個体群は孤立している可能性が高い。個体群の分断・孤立化や対抗種であるコウベモグラの侵入を許すような土壌改良をとまなう開発が個体数を減少させると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の分布域は対抗種であるコウベモグラの分布域と部分的に重複しており、両種が生息する場所では土壌が浅く環境条件の悪いところにアズマモグラが生息する傾向がある。したがって、土壌条件の悪い丘陵地や山地での開発の際は、アズマモグラの生息する可能性を常に検討し、本種の生息が確認された際には、生息域の分断を回避し、土壌条件を改変しないように留意すべきである。

【特記事項】

刈谷市天王町の本刈谷貝塚(晩期縄文時代)から出土したモグラの上腕骨は「やや小型で...アズマモグラのそれをみるような大きさ」であった(直良, 1972)。この遺跡遺存骨がアズマモグラのものであることが証明されれば、現在、知多半島、瀬戸市、設楽町でコウベモグラと拮抗しているアズマモグラの分布域が、縄文の寒冷期から現在までにやや縮小したといえるだろう(子安, 2007)。

【引用文献】

愛知県商工部万博誘致対策局, 1996. アズマモグラ・コウベモグラ. 瀬戸市南東部地区に生息する生物の多様性に関する調査, pp.26-29. 愛知県商工部万博誘致対策局, 名古屋.
原田猪津男, 1996. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
原田猪津男, 1998. ほ乳類. 新編豊川市史第十巻『自然』-本文-, pp.365-370. 豊川市, 愛知県豊川市.
河辺勇治・清田佳奈・森本正俊・子安和弘・織田統一, 2018. 豊田市下山地区で確認されたアズマモグラ. 豊田市自然史博物館報, (28):55-57.
川田伸一郎・姫田 始, 2001. 愛知県設楽町東納庫カトリック内でのモグラ2種の分布調査. マンモス特別号, (3):49-52.
Kawada, S. & Yokohata, Y. 2015. *Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.34-35. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
子安和弘, 2007. 哺乳類. 海上の森の自然史, pp.115-128. あいち海上の森センター, 愛知県瀬戸市.
子安和弘, 2014. アズマモグラ. レッドデータブックおかげさまで 2014, p.175. 岡崎市, 愛知県岡崎市.
子安和弘・織田統一, 2009. アズマモグラ. レッドデータブックあいち 2009動物編, p.79. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3):19-34.
直良信夫, 1972. 本刈谷貝塚発掘の脊椎動物遺体. 本刈谷貝塚, pp.88-92. 刈谷市教育委員会, 愛知県刈谷市.

(子安和弘・織田統一)

モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck)

【選定理由】

本種は極東に限局して生息するコウモリで、国内での分布は比較的広いが、県内では東三河山間部を中心とする2市2町で生息が認められているにすぎない。本種もキクガシラコウモリと同様の洞穴性コウモリであるが、良好な環境を保った森林への依存性がキクガシラコウモリやコキクガシラコウモリ以上に高いと考えられる。生物多様性の高い、良好な環境を保った森林の消滅や減少が本種の採餌場所や生活場所の不足をもたらし、個体群の維持を困難にさせていると考えられる。

【形態】

体重 5.5~11.0g、頭胴長 44~63mm、前腕長 34~41mm、尾長 32~45mm、脛骨長 15.2~17.0mm、後足長 (爪を含む) 10.0~11.8mm、耳介長 14.0~16.8mm、耳珠長 4.5~6.0mm、頭骨最大長 14.2~15.6mm。中型のコウモリで後足が長く、脛骨の半分以上の長さになる。背面の毛色は黒褐色で肛門から足にかけて白い毛がある。耳介と耳珠は細長く、頭骨は比較的細長い。歯式は I2/3, C1/1, P3/3, M3/3=38、脊柱式は C7+T10+L5~6+S5+Cd8~9=35~37 (宮尾, 1974)。

【分布の概要】

【県内の分布】

2009年までに尾張地区では犬山市の愛知用水に連絡する水路で確認され (子安・織田, 2009)、三河地区では豊田市 (原田, 1996a; 寺西, 2002)、設楽町 (原田, 1996b)、東栄町 (寺西, 2002)、新城市 (寺西, 2002) で確認されていた (子安・織田, 2009)。その後、豊田市でも広い分布が確認された (寺西, 2002; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

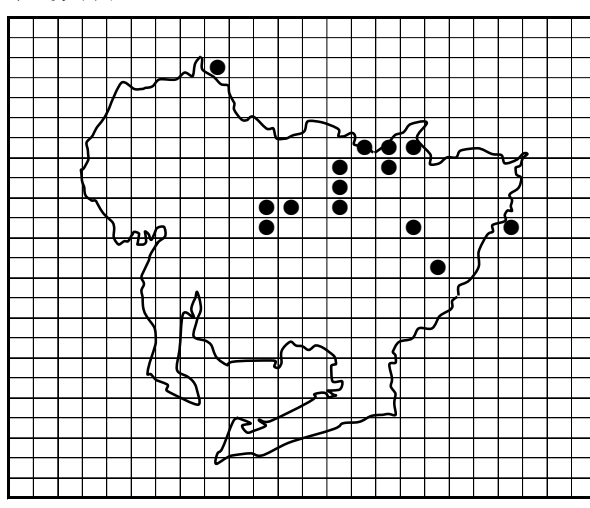
【国内の分布】

国後島、北海道、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐、対馬、壱岐、福江島、種子島、奄美大島、徳之島に分布する (Sano, 2015)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、サハリン、シベリア沿海地方 (Sano, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

昼間は洞穴で休息し、数頭から数十頭の群をつくる。冬期には定まった冬眠洞で群を形成して冬眠する。日没後に出洞して採餌し、夜明け前に戻る。食物は小型の飛翔性昆虫で、森林やその周辺、河畔などで採餌する。森林では樹幹の間や樹冠部で採餌しているらしい。仔は生後 25~35 日で飛翔可能になり、生後 16 ヶ月で性成熟に達する。雌は初夏に特定の洞穴で 1 仔を産む。寿命は 6 年以上。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林の大面積伐採や単一樹種の植林による生物多様性の減少が本種の良好な採食場所を減少させていると考えられる。さらに、生物多様性の保全に配慮しない河川改修、河畔周辺の開発、利用可能な洞穴の消滅といった要因で本種の生活可能な環境が減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息地周辺では、伐採、下刈り、農薬散布により生息環境が破壊されないよう十分な配慮が求められる。また、天然洞穴や人工洞穴の荒廃・攪乱を避け、これらに柵を設置する場合にはコウモリの出入りが可能な設備にしなければならない。

【特記事項】

出産・哺育コロニーが矢作川水系と豊川水系で確認されており、これらは愛知県内の個体群維持において重要な存在であると考えられる。

【引用文献】

原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史 -自然- 本文編, pp.508-513. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 愛知県豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. モモジロコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.80. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶺雄, 1974. 小翼手類の脊椎骨数. 日本哺乳類雑誌, 3: 30-31. 信州哺乳類研究会, 松本.
Sano, A. 2015. *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.107-108. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
寺西敏夫, 2002. 愛知県のコウモリ:アブラコウモリを除く(1998~2002,1). マンモス特別号, (4): 3-13.

(子安和弘・織田銃一)

カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas)

【選定理由】

国内では石川・福島県以南の本州、四国、九州とその属島に広く分布し、県内でも19市5町で生息が認められているが、各地で市街化の進行にともなう生息地の改変により生息環境が急速に失われつつある。

【形態】

体重5.3~14.0g、頭胴長54.0~78.5mm、尾長47~91mm、後足長14~17mm、耳介長7~12mm、頭骨最大長13.7~16.9mm。体は非常に小さく、背面の毛色は赤褐色から暗褐色まで変異がある。腹面は白色。尾は長く、先端部の上面は裸出する。頭蓋では吻の短いのが特徴的であり、卵形で大きな脳頭蓋に幅の狭い頬骨弓をもつ。鼓室胞は大型で、切歯孔の後縁は第1大臼歯の前縁付近かその前方にある。乳頭式は2+0+2=8。歯式はI1/1,C0/0,P0/0,M3/3=16(子安・織田, 2009など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、小牧市、北名古屋市、弥富市、名古屋市、瀬戸市、尾張旭市、長久手市(過去に記録がある：長久手町生活環境部環境課, 2010)、日進市、東郷町、東海市(絶滅?)、知多市、美浜町、南知多町、豊田市、みよし市、岡崎市、安城市、幸田町、設楽町、新城市、豊川市、豊橋市、田原市(宮尾ほか, 1984; 小鹿, 2005; 子安・織田, 2009; 野呂, 2015; 吉鶴, 2019)。

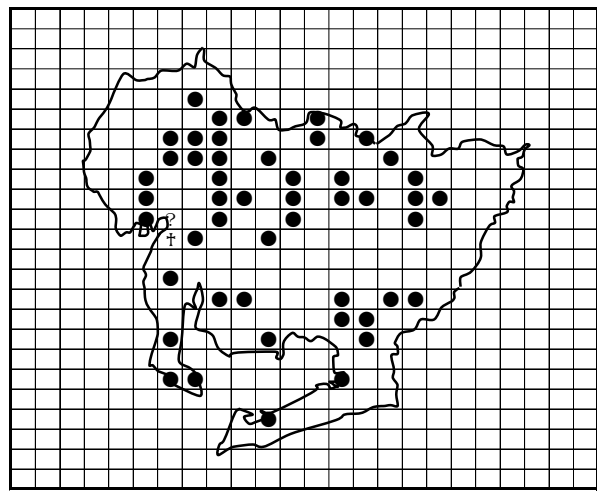
【国内の分布】

石川・福島県以南の本州、四国、九州、隠岐道後、西ノ島、中ノ島、淡路島、豊島、因島、大崎上島、対馬、天草下島、福江島、口永良部島(高田ほか, 2001; Iwasa, 2015)。

【世界の分布】

ヨーロッパから東アジアにかけてのユーラシア大陸(Iwasa, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

低地から標高1,200m付近までの山地に分布するが、低地の草地に多く、森林内にはみられない。春から秋にかけてイネ科草本やススキのような草本の茎の途中に植物の葉を細切したものを編み上げた球巣をつくり、産仔や育仔を球巣中でおこなう。1回に2~8仔を産む。冬期は地下の坑道にすむ。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを食べる。野外での寿命は1年あまり(子安・織田, 2009など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種はイネ科草本の草地に生息する特異な生活様式をもっているために、耕作の放棄された休耕地や県下各地に見られるため池周辺の草地に発達していたことが分布の広がりを保証していた。こうした休耕地や河川敷・ため池周辺での「整備」によってイネ科草本の植生が失われ、生息域が急速に失われつつある(子安・織田, 2009など)。

【保全上の留意点】

休耕地、河川敷、ため池などの周辺では、特に市街化にともなって整備され、結果的にカヤネズミの生息地が失われることが多い。こうした整備を行う場合は、見た目だけの美しさに固執せず、生物多様性の保全に配慮した環境整備を企画する必要がある。

【特記事項】

日本哺乳類学会では種としてのランクが「不能」とされ、生態情報が十分蓄積されていない状況が指摘されている(村上・金子, 1997)。東海市大田町で2018年に発見された生息地は開発によって失われている(吉鶴, 2019)。

【引用文献】

Iwasa, M.A. 2015. *Micromys minutus* (Pallas, 1771). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.170-171. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
子安和弘・織田銃一, 2009. カヤネズミ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.77. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.
長久手町生活環境部環境課, 2010. 長久手町環境資源目録, 48pp. 長久手町, 愛知県長久手町.
野呂達哉, 2015. カヤネズミ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.46. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモス特別号, (7): 4-9.
高田靖司・酒井英一・植松 康, 2001. 五島列島福江島と中通島における小哺乳類の採集結果とカヤネズミの特徴. 日本哺乳類学会 2001 年度大会プログラム・講演要旨集, p.74. 琉球大学理学部, 沖縄県中頭郡西原町.
吉鶴靖則, 2019. 東海市でカヤネズミの巣を確認. 三河生物, 11: 39-40.

(子安和弘・織田銃一)

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber)

【選定理由】

全国的に分布が広く、県内でも比較的広い範囲で生息が認められているが、洞穴性コウモリである本種は冬眠や出産に使用できる適切な洞穴が必要であり、こうした洞穴の消滅や採餌場所の環境悪化によって個体群の維持が困難になっていると考えられる。

【形態】

体重 17~35g、頭胴長 53~82mm、前腕長 52~65mm、尾長 28~45mm、脛骨長 24.5~26.2mm、後足長 (爪を含む) 11~15mm、耳介長 22.5~28.0mm、頭骨最大長 19.9~25.5mm。小翼手亜目の中では大型のコウモリであり、「菊の花」にみたてられた特異な形態の鼻葉をもつ。鼻葉の中央突起は低く、横から見ると先端が丸くなっている。骨口蓋後縁は滑らかな円弧状。歯式は I1/2, C1/1, P2/3, M3/3=32、脊柱式は C7+T12+L5+S5+Cd8~10=37~39 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、春日井市、津島市、名古屋市、瀬戸市、長久手市、豊田市、幸田町、西尾市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊橋市、田原市 (絶滅) (宮尾ほか, 1984 ; 子安ほか, 2001 ; 2016 ; 子安・織田, 2009 ; 野呂, 2015 ; 寺西, 2016 ; 子安, 2018)。

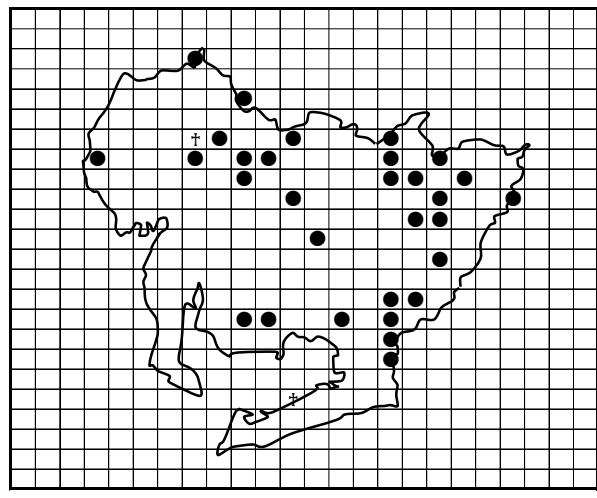
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、三宅島、八丈島、新島、佐渡島、隠岐、対馬、奄岐、五島列島、屋久島、口之島、中之島 (Sano, 2015)。

【世界の分布】

日本からアジア中南部をへてヨーロッパとアフリカ地中海沿岸 (Sano, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

昼間は海食洞、洞穴、トンネル、家屋などに数頭 (時に 1 頭) から数百頭の群で休息する。冬期には冬眠洞の天井から懸垂して冬眠する。夜間に単独で飛行しながら主として昆虫を捕食する。採餌場所は、森林や森林に隣接した小丘陵、河川、草原、平地など。採餌活動は夕暮れと夜明けで、真夜中に特定の休息場所で休息する。交尾は秋におこなわれるが、精子は雌の生殖道内に貯蔵され冬眠から覚めてから受精する。雌は特定の出産洞で出産集団を形成して初夏に 1 仔を生む (子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

大面積伐採によって森林域の採食場所減少に加え、出産や冬眠に使用される洞穴の消滅や洞穴環境の悪化のため個体数が減少していると考えられる。また、体が大きいことから必要とされる食餌量も多量になり、餌となる昆虫が質量ともに良好に保たれねばならず、そのための森林を中心とした生物多様性が求められているが、開発や単一植栽によって生活環境の質が低下している。

【保全上の留意点】

洞穴性コウモリは 1 年の生活サイクルを通じて多種の洞穴 (冬眠洞、出産・育仔洞、春と秋のねぐら洞) を利用する。こうした洞穴の破壊や環境悪化を防ぐように留意するとともに、特に出産・育仔洞や冬眠洞の周辺での開発に際しては森林伐採や河川周辺の環境変化による採餌環境の破壊を避けなければならない。また、本種の生息可能な洞穴は天然・人工を問わず、これを完全に閉鎖しないと、横棒を主体とした柵によってコウモリの出入りの確保に十分配慮する必要がある。

【特記事項】

名古屋市守山区では 2 地点での生息が確認されていたが、このうち竜泉寺の防空壕跡は土砂で埋まり利用されなくなった (野呂, 2015)。田原市田原町での生息については内藤 (1983) が記述しているが、この石灰岩洞穴の生息地は開発により失われている。長久手市と豊田市 (子安ほか, 2016 ; 子安, 2018) では新たな生息地が確認されている。

【引用文献】

- 子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. キクガシラコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.86. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・小林秀司・大竹 勝, 2001. 愛知県の食虫類と翼手類. マンモス特別号, (3): 19-34.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
内藤和志, 1983. 三遠の洞穴. 地底の音, pp.22-35. 三遠洞くつ研究会, 松本.
Sano, A. 2015. *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.58-60. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊).
野呂達哉, 2015. キクガシラコウモリ. レッドデータブックあいち 2015 動物編, p.35. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.

(子安和弘・織田銃一)

コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck

【選定理由】

日本の特産種で全国的には分布が広いが、県内での分布は比較的狭い。本種は洞穴性コウモリであり、冬眠や出産に使用できる適切な洞穴の条件が制限されていると考えられる。こうした洞穴の消滅や適当な採餌場所の不足が個体群の維持を困難にさせていると考えられる。

【形態】

体重 4.5~9.0g、頭胴長 31.5~50.0mm、前腕長 36~44mm、尾長 16~27mm、脛骨長 16.5~18.0mm、後足長 (爪を含む) 8.0~9.5mm、耳介長 14~19mm、頭骨最大長 14.8~17.5mm。キクガシラコウモリと同様の鼻葉をもつが、はるかに小型。鼻葉は前葉が小さく、中央突起が高く横からみると先端が細く尖っている。骨口蓋後縁は正中中部が後方に突出している。歯式は I1/2, C1/1, P2/3, M3/3=32、脊柱式は C7+T12+L5+S5+Cd8~10=37~39 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、瀬戸市、長久手市、豊田市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊橋市 (宮尾ほか, 1984; 原田, 1989; 子安・織田, 2009; 寺西, 2016; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、奥尻島、伊豆大島、三宅島、新島、御蔵島、八丈島、佐渡島、対馬、壱岐島、福江島、屋久島、種子島、口永良部島、口之島、中之島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島 (Sano, & Armstrong, 2015)。

【世界の分布】

日本固有種 (Sano, & Armstrong, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

洞穴性のコウモリで、昼間は数十頭から百頭を越える群で休息する。冬期には定まった冬眠洞で数頭から千頭を越える群で冬眠する。日が暮れてから出洞して採餌するが、真夜中には休憩する。食物は主として小型の飛翔性昆虫で、水面や地面すれすれの場所で採餌する。雌は生後 3 年から繁殖し、初夏に特定の洞穴で 1 仔を産む。仔は約 25 日で飛翔可能になる (子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林の大面積伐採とその後の単一樹種の植栽が生活場所である森林内の生物多様性を低下させ、可能な採食場所を減少させていると考えられる。さらに、出産や冬眠に使用可能な適切な洞穴の消滅や洞穴環境の悪化のために個体数が減少していると考えられる。キクガシラコウモリが洞穴の比較的口に近い部分を利用するのに対してコキクガシラコウモリは洞穴の深部を利用するのが普通であり (阿部, 2000)、このことが本種の利用可能な洞穴をさらに減少させていると考えられる。

【保全上の留意点】

1 年を通じて冬眠洞、出産・育仔洞、春と秋のねぐら洞が必要であるのはキクガシラコウモリと同様である。こうした洞穴の破壊や環境悪化をもたらす開発や洞穴の荒廃・攪乱を避けなければならない。特に出産・育仔洞や冬眠洞の周辺においては森林ならびに河川周辺の環境を本種の生息が可能であるように保全しなければならない。また、本種の生息する洞穴に柵を設けて人の出入りを制限する際には、横棒を主体とする柵にしてコウモリの出入りを可能にしなければならない。

【特記事項】

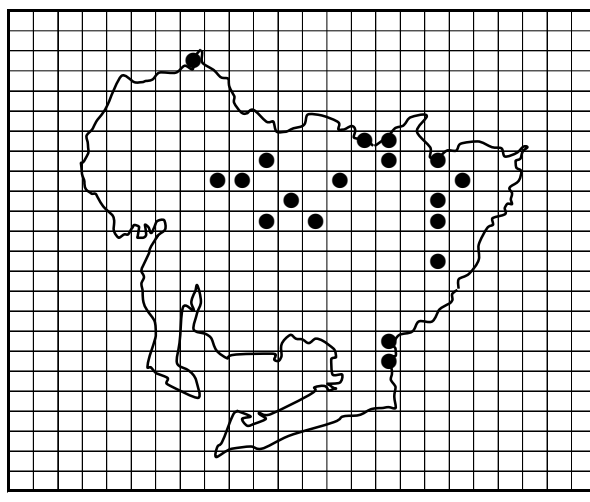
県内の分布地のうち、設楽町津具地域、豊橋市、犬山市、瀬戸市については寺西敏夫氏ほかの実地調査によって確認されている。豊根村については原田 (1989)、設楽町と豊田市については宮尾ほか (1984) による。新城市鳳来地域については愛知教育大学に標本が存在した (子安・織田, 2009)。近年、豊田市の分布情報が詳しく調べられ、広い分布が確認された (子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
原田猪津男, 1989. ほ乳類. 豊根村誌, pp.33-38. 豊根村, 愛知県北設楽郡豊根村.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. コキクガシラコウモリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.85. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
Sano, A. & Armstrong, K.N. 2015. *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.61-62. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
寺西敏夫, 2016. 愛知県におけるコウモリ相と生息実態. NPO 法人東洋蝙蝠研究所 2016 年度研究会抄録 (自刊).

(子安和弘・織田銃一)

県内分布図



ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz)

【選定理由】

日本固有種で、国内でも本州、四国、九州、隠岐島後の限られた地域にしか生息しない。各地域個体群は分断化・孤立化しており、県内の小個体群同士および隣接県の個体群が連続的な分布をしている証拠はなく、個体群の孤立化と生活環境の悪化により個体数が減少していると考えられる。

【形態】

体重 12.7~23.0g、頭胴長 59~84mm、尾長 33~54mm、後足長 15~17mm、耳介長 6~9mm、頭骨最大長 23.5~24.6mm。四肢が短く体型はハムスターに似ているがリスに似た扁平な尾をもつ。淡褐色をした背面の正中には黒い線があり、腹面の色はやや淡い。夏毛では背面の毛色は灰色から褐色まで種々の中間型を介在させて変異に富む。耳介は短くほとんど体毛に埋まる。盲腸をもたない。頭骨では吻は長いものの切歯孔は小さい。乳頭式は 2+1+1=8 または 2+0+1=6。歯式は I1/1, C0/0, P1/1, M3/3=20 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村(宮尾ほか, 1984; 子安・織田, 2009)。

【国内の分布】

本州、四国、九州、隠岐島後(Iwasa, 2015)。

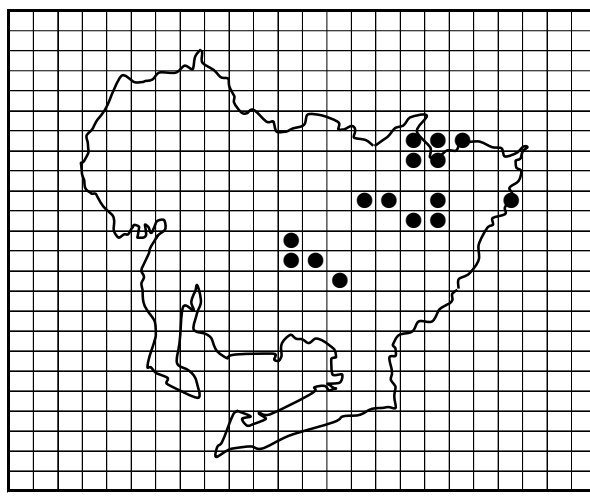
【世界の分布】

日本固有種(Iwasa, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

亜高山帯以下の山地天然林にすみ、樹上性が強く、夜行性で、樹洞や樹上に苔や樹皮などで巣をつくる。冬期には完全な冬眠をおこなう。冬眠場所は樹洞の巣や樹皮の割れ目、落葉や土中などである。果実、種子、昆虫などを食べる。春から秋にかけて繁殖し、2~7仔を産む。妊娠期間は3週間。小鳥のための巣箱に入ることが知られているが、この中で冬眠はしない。ゴルフ場内の残地林の巣箱を利用した例も知られている(子安・織田, 2009 など)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

中島(2001)によるヤマネの全国分布状況によると、愛知県のヤマネは長野県最南端の小個体群とわずかにつながるのみで、南アルプスの個体群から孤立している可能性がある。既知の分布情報から、県内の各小個体群は明らかに孤立化しており、道路やダム造成などによる小個体群の分断と森林伐採は生息環境の悪化と分布面積の減少をもたらす、個体数を減少させる要因と考えられる。

【保全上の留意点】

ヤマネの分布域では生息個体群を分断する道路・ダム湖の造成や森林の無秩序な伐採・開発を避けるべきで、やむを得ない場合にも個体群の分断化の影響を減らす回廊の設置(湊, 2000)や、失われる分布面積に匹敵する代替環境造成として潜在植生の復元などをはかる必要がある。

【特記事項】

毛色には地理的変異があり、山梨産は灰色、和歌山産は茶色、長崎産は濃い茶色になっている(湊, 2000)。また、西日本産(福井県、和歌山県、高知県)と中部産(山梨県、長野県)ではヤマネの塩基配列が大きく異なり、200万年程度の分岐年代に相当するという(Suzuki *et al.*, 1997)。日本哺乳類学会では危急種(村上・金子, 1997)、文化財保護法による天然記念物。化石は、本州の中期・後期更新世と完新世から出土している(Iwasa, 2015)。愛知県内で、フクロウのペレットからヤマネの下顎骨が発見されている(真野・杉山, 2008)。

【引用文献】

- 子安和弘・織田統一, 2009. ヤマネ, レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.82. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
湊 秋作, 2000. ヤマネって知ってる? ヤマネおもしろ観察記, 126pp. 築地書館, 東京.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
Iwasa, M.A. 2015. *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.148-149. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
真野 徹・杉山時雄, 2008. フクロウの巣箱から確認された動物の骨格. 西三河野鳥研究年報, 11: 1-6.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.
中島福男, 2001. 日本のヤマネ, 169pp. 信濃毎日新聞社, 長野.
Suzuki, H., S. Minato, S. Sakurai, K. Tsuchiya, I.M. Fokin, 1997. Zoological Science, 14:167-173.

(子安和弘・織田統一)

スミスネズミ *Eothenomys smithii* (Thomas)

【選定理由】

日本固有種で、本州の南方と四国、九州、隠岐島後に生息するが、県内では三河地域の4市1町1村と尾張地域の1市で生息が認められるにすぎない。森林とその周辺に生息し、山地での道路建設やダム造成によって個体群が分断されやすく、縮小・孤立化した小個体群が絶滅する可能性がある。

【形態】

体重20~35g、頭胴長75~115mm、尾長33~55mm、後足長16.0~18.5mm、耳介長10.0~13.5mm、頭骨最大長22.0~25.7mm。背面の毛色は赤褐色から黄褐色まで変異があり、腹面は黄褐色。体の大きさは南方のものが北方のものより大きくなる傾向がある。短い尾を持ち、尾率は通常40~60%の範囲にある。頭蓋はヤチネズミより小さく、鼓室胞はやや小さく扁平。大臼歯は生涯無根。乳頭式は0+0+2=4または1+0+2=6。歯式はI1/1,C0/0,P0/0,M3/3=16(子安・織田, 2009など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村、新城市、豊川市(宮尾ほか, 1984; 子安・織田, 2009)。

【国内の分布】

新潟・福島県以南の本州、四国、九州、隠岐島後(子安・織田, 2009; 子安, 2014など)。

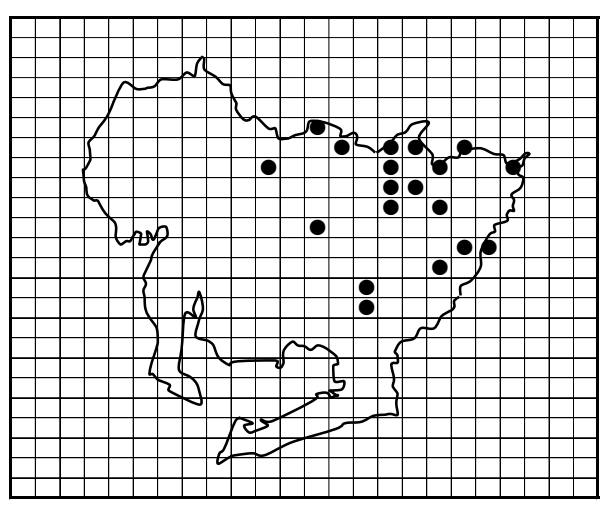
【世界の分布】

日本固有種(Kaneko, & Iwasa, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から高山までの森林およびその周辺にすみ、落葉・腐食層の厚い湿潤な環境に多い。草本類の葉や茎に加え、種子などを採食する。繁殖期は地域によって異なり、南方では春と秋の2山型、北方では夏の1山型となっており、1回に1~6仔、通常2~3仔を産む(金子, 1992a; 宮尾, 1967)。天然林に多く、人工造林地にはほとんど生息しない(金子, 1992b)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内の分布は大半が三河地域で、尾張地域では瀬戸市にのみ生息が認められる。三河地域の個体群は連続的なものが多いと考えられるが、瀬戸市の個体群が三河地域の個体群と連続的な分布をしているか現時点では不明である。減少の要因としては、道路造成、ダム湖の造成、伐採や開発にともなう森林面積の減少などがあげられる。

【保全上の留意点】

沖積平野や主要国道はスミスネズミの分布障壁となる(金子, 1992b)から、個体群分断化のおそれのある地域での森林面積の減少や分断をとまなう開発は個体群の分断と個体数の縮小をまねくおそれがある。個体群の分断をもたらないような回廊の設置や、失われる可能性のある分布面積に匹敵する代替環境造成として潜在植生の復元などをはかる必要がある。

【特記事項】

日本哺乳類学会では危急種とされ、なかでも「愛知県尾張」の個体群は「保護すべき地域個体群」のひとつに指定されている(村上・金子, 1997)。

【引用文献】

- 金子之史, 1992a. 日本の哺乳類(17)スミスネズミ. 哺乳類科学, 32: 39-54.
金子之史, 1992b. 四国における野ネズミ3種の地形的分布. 日本生物地理学会会報, 47: 127-141.
Kaneko, Y. & Iwasa, M.A. 2015. *Eothenomys smithii* (Thomas, 1905). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.160-161. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
子安和弘, 2014. スミスネズミ. レッドデータブックおかげざき 2014, p.167. 岡崎市, 愛知県岡崎市.
子安和弘・織田銃一, 2009. スミスネズミ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.84. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
宮尾嶽雄, 1967. 日本列島における小哺乳類の地理的変異に関する研究 I. スミスネズミの地理的変異第2報. 後足長, 尾長, 仙尾椎骨数および繁殖活動の地理的変異. 成長, 6: 7-18.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
村上興正・金子之史, 1997. ネズミ亜目 MYOMORPHA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.75-90. 文一総合出版, 東京.

(子安和弘・織田銃一)

ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards)

【選定理由】

本州、九州、佐渡島、能登島にのみ生息する日本固有種であるが、近年の市街化にともなってその生息環境が急速に失われつつあり、生息域と生息数の減少がいちじるしい。

【形態】

体重 22～62g、頭胴長 95～136mm、尾長 29～50mm、後足長 16.5～20.4mm、耳介長 10.0～12.2mm、頭骨最大長 25.5～29.2mm。背面の毛色は黄褐色から灰黄褐色まで変異があり、腹面は灰白色。後足底の蹠球数は 5 個と 6 個の場合があり、前者が多い。体の大きさは南方のものが北方のものより大型化する傾向がある。骨口蓋の後端にはヤチネズミやスミスネズミにはない窪みがある。大臼歯は生涯無根。乳頭式は通常 2+0+2=8。歯式は I1/1, C0/0, P0/0, M3/3=16 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、江南市、春日井市、稲沢市、北名古屋市、愛西市、名古屋市(中区では絶滅)、長久手市(過去に記録がある：長久手町生活環境部環境課, 2010)、知多市、東浦町、豊田市、みよし市、岡崎市、刈谷市、安城市、西尾市、幸田町、設楽町、豊根村、豊川市、田原市(宮尾ほか, 1984；鳥居, 2000；子安・織田, 2009；小鹿, 2015)。

【国内の分布】

本州、九州、佐渡島、能登島(Iwasa, 2015)。

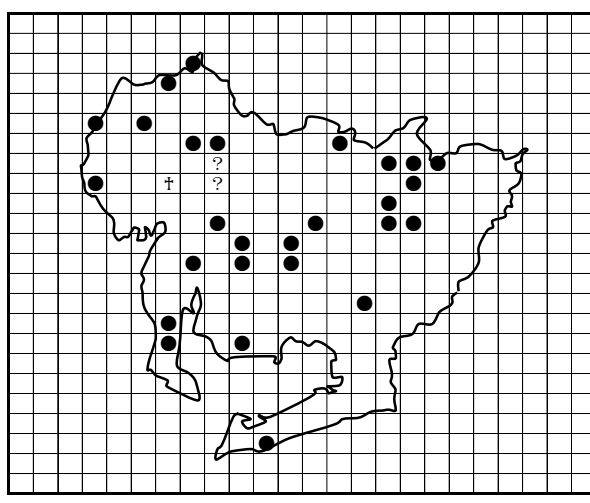
【世界の分布】

日本固有種(Iwasa, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から高山にまで分布し、広葉樹林や針葉樹林にも見られるが、低地の農耕地を含む草原的環境に最も多い。地下性が強く、地表直下にトンネルを掘って生活している。植物食に最も適応したネズミ類で、草本類やその根、根茎などを食べる。繁殖期は北方や高標高地では夏を中心とした 1 山型であるが、南方では春と秋の 2 山型で、1 回の妊娠で 1～9 仔、通常 3～5 仔を産む。愛知県内での詳しい生態は不明(子安・織田, 2009 など)。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

大正から昭和の初年にかけては、ハタネズミはハツカネズミとともに県下の平野部を代表する野ネズミであり、名古屋市の中心部(中区御器所・高畑)でも生息していた(青木, 1926)。現在では個体数がきわめて少なくなっており(宮尾ほか, 1984)、これは市街化の進行による生息地の減少が主因と考えられるが、ユーラシア北部のタイガ地域と台湾高地に類縁を持つ北方系の種なので地球温暖化の影響を受けている可能性も考えられる。名古屋市名東区猪高町の明徳公園でも 1979 年に確認されているが(宮尾ほか, 1984)、この地域は宅地に囲まれた小区域であるためにノウサギ同様に絶滅した可能性が高い。長久手市の北西部と南西部では 2005 年以前に生息記録がある(長久手町生活環境部環境課, 2010)ものの近年の生息状況は不明であり、絶滅した可能性がある。

【保全上の留意点】

牧草地を含む草原、造林地、河川敷・耕地とその周辺の草地在がハタネズミの主要な生息地であるが、市街地周辺ではこうした環境が急速に整備され失われつつある。こうした場所での環境整備に際しては格段の配慮が必要であり、地域個体群の絶滅をもたらさないようにしなければならない。

【特記事項】

ハタネズミは日本の 4 つの島にのみ生息する固有種であるが、染色体からみた最近縁種は台湾の高地にのみ生息する固有種のキクチハタネズミ *Microtus kikuchii* とユーラシア大陸北部に分布するソンドラハタネズミ *M. oeconomus* であることが示された(Mekada, et al., 2001)。化石は、本州の中期・更新世および本州・九州の完新世から出土している(Iwasa, 2015)。

【引用文献】

- 青木文一郎, 1926. 名古屋市及其郊外に棲息する鼠類の観察. 動物学雑誌, 38: 341-346.
Iwasa, M.A. 2015. *Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.163-164. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
金子之史, 1975. 日本の哺乳類(12)齧歯類ハタネズミ属. 哺乳類科学, 30: 3-26.
子安和弘・織田統一, 2009. ハタネズミ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.83. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
Mekada, K., M. Harada, L.K. Lin, K. Koyau, P.M. Borodin and S.-I. Oda, 2001. Pattern of X-Y chromosome pairing in the Taiwan vole, *Microtus kikuchii*. Genome, 44: 27-31.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
長久手町生活環境部環境課, 2010. 長久手町環境資源目録, 48pp. 長久手町, 愛知県長久手町.
小鹿登美, 2015. 安城市におけるハタネズミの記録. 三河生物, 7:89.
鳥居春友, 2000. 哺乳類. 新編東浦町史資料編 2(自然), pp.190-200. 東浦町, 愛知県東浦町。

(子安和弘・織田統一)

ニホンリス *Sciurus lis* Temminck

【選定理由】

日本固有種で、分布が確実なのは本州と四国のみで、九州と淡路島では最近の記録がなく (Tamura, 2015)、絶滅した可能性が高い。愛知県内では渥美半島での生息記録がなく、知多半島では常滑市と知多市で「時に出没することあり」とされていたにすぎない (宮尾ほか, 1984)。市街化や開発等によって生息環境が分断され、個体群が維持される条件への脅威が増大していると考えられる。

【形態】

体重 250~310g、頭胴長 160~220mm、尾長 130~170mm、後足長 48~58mm、耳介長 22~31mm、頭骨最大長 46.3~55.5mm。エゾリスよりもやや小型。背面は夏毛では赤褐色、冬毛では灰褐色で、腹面は純白。尾の先が白く、冬毛では耳の先にふさ毛が生じる。歯式は I1/1, C0/0, P2/1, M3/3=22。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、春日井市、名古屋市 (守山区東谷山・森林公園・小幡緑地・八竜緑地)、瀬戸市、尾張旭市 (森林公園)、知多市、常滑市、豊田市、みよし市、岡崎市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、蒲郡市 (絶滅?)、田原市 (宮尾ほか, 1984; 大羽, 2005; 子安・小鹿, 2014; 名和, 2015; 子安ほか, 2016; 春日井市, 2016)。

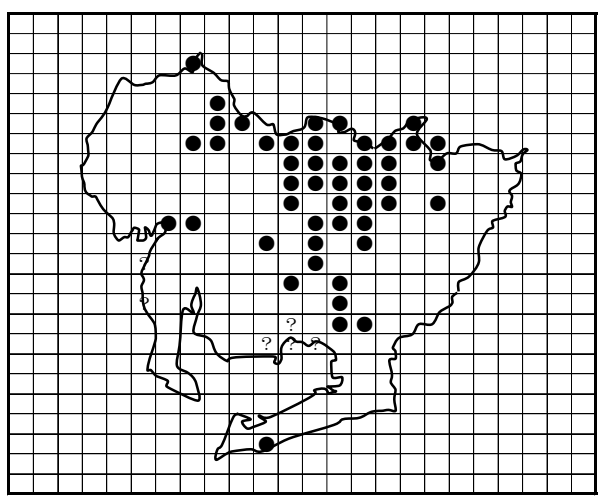
【国内の分布】

本州、四国。九州と淡路島では近年の確実な記録がない (Tamura, 2015)。

【世界の分布】

日本固有種 (Tamura, 2015)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平野部から山地にかけての森林がニホンリスの生息地であり、ドングリ、クルミ、マツなどの種子をよく食べるが、花、芽、果実、キノコ類、昆虫なども食べる (宮尾ほか, 1984 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

1984年に発行された「愛知の動物」(宮尾ほか, 1984)ではムササビやヒメネズミとともに「狭域分布種」と位置づけられていた。減少の要因として、市街化や開発等による生息環境の分断や生息環境の劣化が考えられる。

【保全上の留意点】

ニホンリスの個体群が安定して維持されるために連続した森林が開発等により分断されることをさけるとともに、植生の復元等によって孤立した個体群の連続性を回復する必要がある。

【特記事項】

知多市と常滑市では1980年に2頭の捕獲記録があるのみ (宮尾ほか, 1984)であり、絶滅した可能性もある。蒲郡市での分布は1974年の「蒲郡市史」に基づいた宮尾ほか (1984)によるが、その後の記録は明瞭でなく絶滅の可能性もある。環境省のレッドリストでは「中国地方」と「九州地方」の個体群が「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されている (押田, 2014)。化石は山口県の中期更新世、本州中南部と四国の後期更新世、本州中部の完新世から出土している (Tamura, 2015)。

【引用文献】

- 春日井市, 2016. かすがい環境まちづくりパートナーシップ会議事業報告書平成27年度, 8 pp. 愛知県春日井市, 春日井.
子安和弘・小鹿登美, 2014. ニホンリス *Sciurus lis* Temminck. レッドデータブックおかげさき 2014, p.172. 岡崎市, 愛知県岡崎市.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
名和 明, 2015. ニホンリス. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.37. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
押田龍夫, 2014. 中国地方のニホンリス・九州地方のニホンリス. Red Data Book 2014, 1 哺乳類, pp.106-109. ぎょうせい, 東京.
大羽康利, 2005. 渥美半島「越戸(おっと) 大山へリコプター離着陸訓練場」問題について. しろちどり, (46): 20-21.
Tamura, N. 2015. *Sciurus lis* Temminck, 1844. The wild mammals of Japan, 2nd ed., pp.192-195. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

(子安和弘)

ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck)

【選定理由】

ムササビの生活はスギ林に依存しており、都市近郊では社寺林として残された杉林を主な生活場所としている。こうした社寺林はたとえ境内の樹木が保存されていても、その周囲が宅地化などによって開発されたり、飛び移れる樹木が失われることによって生活可能域の分断・孤立化が起り、地域個体群が分断・縮小・絶滅へすすむと考えられる。

【形態】

頭胴長 340～483mm、尾長 280～414mm、後足長 60.5～71.0mm、耳介長 35～43mm、頭骨最大 66.0～68.6mm。大型でニホンモモンガ同様、前肢の手根部から後肢の膝にかけて飛膜を持ち、滑空することができる。背面の毛色は褐色系であるが地域によって変化し、腹面は白色。切歯孔はきわめて小さく、歯隙長の 1/2 以下。下顎の角突起は幅広いが、ニホンモモンガのようにねじれない。歯式は I1/1, C0/0, P2/1, M3/3=22 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、春日井市、名古屋市(守山区東谷山)、瀬戸市、豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、豊橋市(宮尾ほか, 1984; 春日井市, 2008; 子安・織田, 2009; 名和, 2015; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。田原市の 2 カ所の貝塚から出土している(山崎・織田, 2005; 子安, 2014)。

【国内の分布】

本州、四国、九州にのみ分布(Oshida, 2015)。

【世界の分布】

日本固有種(Oshida, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から亜高山帯までの山地帯森林に生息し、夜行性。樹上性で、樹洞もよく利用するほか、樹上につくった球状の巣を利用する。樹木の葉、芽、花、果実、樹皮、種子などを食べる。生活はスギ林に依存しており、スギの樹皮は巣材としても食用にも用いられ、雄花と若枝の根元は特に好んで食べる。冬と初夏に交尾し、74 日ほどの妊娠期間をへて、1 回に 1～2 仔を産む。雄が生殖可能になるまで 2 年近く必要である(子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内での分布は比較的広く、9 市 2 町 1 村で生息が認められている。都市近郊ではスギの大木のある社寺林で生息の認められることが多く、こうした場所ではスギの樹皮の剥皮跡が認められたり、糞や若枝の先端が落ちていたり、板壁に穴があげられているのでムササビの生息が確認できる。スギ林に依存した生活を送っているために、スギ林そのものやその周囲の森林や林の伐採はムササビの移動を制限して隣接する個体群との遺伝的交流を減らして孤立化させ、ついには絶滅に至ると考えられる。

【保全上の留意点】

周囲に森林や林の存在しない島状の生息地(例えば都市近郊の社寺林で周囲が田畑や宅地に囲まれている場所)となるような生息場所では樹木の伐採によってムササビの移動が制限されないように留意すべきである。

【特記事項】

田原市の縄文遺跡(伊川津貝塚・保見貝塚)から出土していることから(山崎・織田, 2005; 子安, 2014)、渥美半島では縄文時代以降に絶滅した可能性が高い。2009 年における県内分布図(子安・織田, 2009)に比べて今回の分布が拡大したように見えるのは、実際の分布域の拡大ではなく、豊田市における詳細な分布調査によるものと考えられる(子安ほか, 2016; 子安, 2018 参照)。名古屋市熱田区の玉ノ井遺跡(縄文～弥生)からも出土している(新美, 2003)。化石は、本州南部の中期更新世、本州中南部・四国・九州の後期更新世、本州・四国・九州の完新世から出土している(Oshida, 2015)。

【引用文献】

春日井市, 2008. 平成 18・19 年度自然環境保全地区候補地二次調査報告(概要版), 8 pp. 春日井市, 愛知県春日井市。

子安和弘, 2014. ムササビ. レッドデータブックおかげさき 2014, p.174. 岡崎市, 愛知県岡崎市。

子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田。

子安和弘・織田銃一, 2009. ムササビ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.81. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋。

子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田。

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋。

名和 明, 2015. ムササビ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.38. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋。

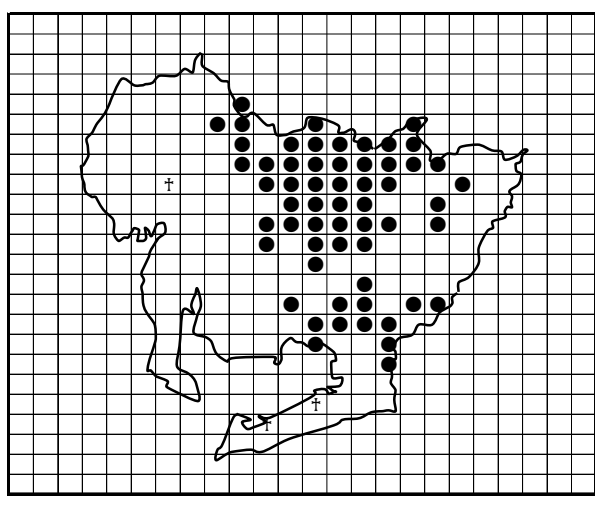
新美倫子, 2003. 玉ノ井遺跡第 3 次調査出土の動物遺体, 埋蔵文化財調査報告 44, pp.157-158. 名古屋市教育委員会。

Oshida, T. 2015. *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.200-201. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

山崎 健・織田銃一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類(縄文時代～弥生時代). マンモ・ス特別号, (7): 10-16.

(子安和弘・織田銃一)

県内分布図



ニホンノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck

【選定理由】

日本固有種で、本州、四国、九州、その属島に生息する (Yamada, 2015)。野外での目撃機会が減少しており、森林環境の変化や市街化による森林緑地の減少等による生息環境の悪化などが生息に好適な環境や個体数の維持に脅威を与えていると考えられる。

【形態】

体重 1,300~2,500g、頭胴長 430~540mm、尾長 20~50mm、後足長 130~150mm、耳介長 60~80mm、頭骨最大長 79.3~92.5mm。北海道に生息するユキウサギよりも小型。腹面が白色である以外ほぼ全身が茶褐色であるが、耳の先端は黒い。本州の東北部や日本海側の積雪地帯および佐渡のものは、冬になると耳の先端が黒いのを除き全身白色になる。県内のノウサギは冬季に白化しない。歯式は I2/1, C0/0, P3/2, M3/3=28 (宮尾ほか, 1984 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市 (春日井市, 2006 ; 2008 ; 2010 ; 南ほか, 2018)、名古屋市 (守山区)、瀬戸市、東海市、知多市、東浦町、美浜町、南知多町、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、幸田町、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、豊橋市、田原市 (宮尾ほか, 1984 ; 愛知県商工部万博誘致対策局, 1996 ; 高田, 2002 ; 名和, 2010 ; 名和・野呂, 2015 ; 子安ほか, 2016 ; 藤井ほか, 2016 ; 東浦町生活経済部環境課, 2017 ; 子安, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州およびその属島。島嶼部の分布は、佐渡島 (亜種サドノウサギは環境省準絶滅危惧)、隠岐諸島、五島列島、天草諸島、下甕島 (Yamada, 2015 など)。

【世界の分布】

日本固有種 (Yamada, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から山地にかけての森林・平原・河川敷などに生息し、夏は緑草、冬は樹皮や枝先も食べる。主に夜行性で巣穴は掘らず、春から夏まで 3~5 回出産する (宮尾ほか, 1984 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980 年代には、島嶼を除く愛知県のほぼ全域に分布が認められ、「広域分布種」とされていた (宮尾ほか, 1984)。2010 年になされた、名古屋市内の 34 区画に設置された自動カメラなどによる調査の結果では、守山区東谷山の 1 区画で確認されたのみで (名和, 2010)、岡崎市でも生息痕や目撃例の減少が懸念されている (子安・小鹿, 2014)。植林地・造林地においては、生息に適した明るい草地が減少していること、都市部の緑地公園で孤立した個体群の絶滅や都市化による生息地の消滅がノウサギ減少の要因と考えられる。知多半島、渥美半島、西尾市における絶滅が特に懸念される。

【保全上の留意点】

分布の周辺域では個体群の孤立化が地域的な絶滅を招きやすいため、広域を開発するには好適な生息環境の維持と連続する生息域を確保する配慮が必要である (子安・小鹿, 2014)。春日井市潮見坂平和公園の個体群 (春日井市, 2008) のように住宅地に囲まれて周囲から孤立している集団は地域的な絶滅に注意を払う必要がある。

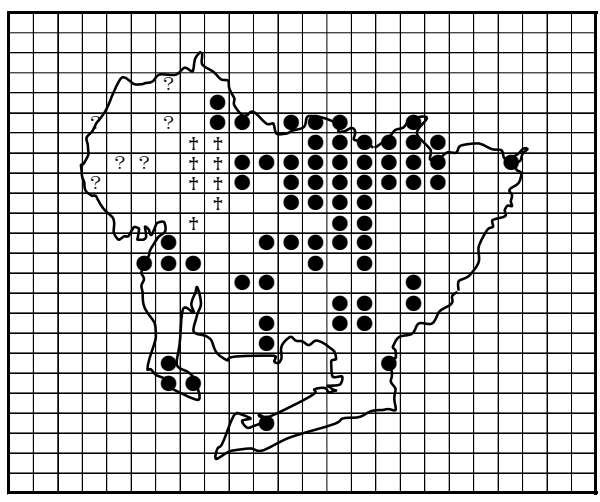
【特記事項】

名古屋市内では、守山区、名東区、千種区、天白区、緑区で生息が確認されていたが、守山区東谷山以外の個体群は絶滅したと考えられ (名和・野呂, 2015)、扶桑町、稲沢市、小牧市、愛西市、あま市、清須市、大治町、東郷町、みよし市でも絶滅している可能性がある。化石は本州西部の中期更新世から出土している (Yamada, 2015)。

【引用文献】

- 愛知県商工部万博誘致対策局, 1996. アズマモグラ・コウベモグラ. 瀬戸市南東部地区に生息する生物の多様性に関する調査, pp.26-29. 愛知県商工部万博誘致対策局, 名古屋.
藤井太一・川本宏和・白子智康・上野 薫・南 基泰, 2016. 愛知県知多市臨海工業地帯企業緑地におけるカメラトラップ法による哺乳類調査. 日本緑化工学会誌, 42: 320-329.
東浦町生活経済部環境課, 2017. 東浦自然環境学習の森基本計画見直し版, 24pp. 東浦町, 愛知県東浦町.
春日井市, 2006. 高森林特別緑地保全地区植生等調査報告書 (概要版), 43 pp. 春日井市, 愛知県春日井市.
春日井市, 2008. 平成 18・19 年度自然環境保全地区等候補地二次調査報告 (概要版), 8 pp. 春日井市, 愛知県春日井市.
春日井市, 2010. 平成 20・21 年度自然環境保全地区等候補地二次調査報告 (概要版), 8 pp. 春日井市, 愛知県春日井市.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・小鹿登美, 2014. ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck. レッドデータブックおかげさき 2014, p.173. 岡崎市, 愛知県岡崎市.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
南 基泰・水越翔大・上野 薫・藤井太一, 2018. 愛知県春日井市薬水の森におけるカメラトラップ法を用いた哺乳類調査, 生物機能開発研究所紀要 (18), 83-93.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
名和 明, 2010. 名古屋市内における哺乳類の記録. マンモ・ス特別号, (12): 17-23.
名和 明・野呂達哉, 2015. ニホンノウサギ. レッドデータブックおかげさき 2015 動物編, p.37. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
高田靖司, 2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, (62): 1-5.
Yamada, F. 2015. *Lepus brachyurus* Temminck, 1844. The wild mammals of Japan, 2nd ed., pp.216-217. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto. (子安和弘)

県内分布図



ニホンテン *Martes melampus* (Wagner)

【選定理由】

ニホンテンは国内の主要な島々と朝鮮半島南部にのみ生息するが、現在の県内での分布は三河地域の山間部に限られ、知多半島・渥美半島および平野部では絶滅したと考えられる。三河地域での分布は比較的広いが、森林域の縮小や生息環境の悪化にともない個体数が減少する可能性がある。

【形態】

頭胴長 410~490mm、尾長 170~233mm、後足長 75~98mm、耳介長 31.5~45.0mm、頭骨最大長 78.9~91.8mm。尾率は 40%以上となるのが普通。性的二型があり、雄は雌より大きい。毛色はあざやかな黄色から褐色のもので変異に富み、黄色のものはキテン、褐色のものはステンと一般に呼ばれている。頭蓋では比較的吻が長く幅が狭い。雄では脳頭蓋の正中部に明らかな矢状稜が認められるが、雌では稜線にならない。歯式は I3/3, C1/1, P4/4, M1/2=38 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市 (春日井市, 2010)、名古屋市 (守山区東谷山:野呂, 2015 による推定)、瀬戸市、尾張旭市、豊田市、岡崎市、幸田町、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、田原市 (宮尾ほか, 1984; 大羽, 2005; 子安・織田, 2009; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。

【国内の分布】

北海道南部 (導入)、本州、四国、九州、佐渡島 (導入)、淡路島、対馬に分布 (子安・織田, 2009; Masuda, 2015)。

【世界の分布】

日本固有種 (Masuda, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

森林に生息し、木登りが得意で、通常は樹洞に営巣するが、人家の天井などを利用することもある (阿部, 2000)。食物はネズミなどの小哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類、果実類などである。特に秋にはサルナシやアケビなどの漿果を大量に食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内でテンの生息が確実なのは三河地域を中心とする 10 市町村であり、知多半島には確かな記録がない。先史時代の遺存骨が 八王子貝塚 (西尾市上町八王子)・枯木宮貝塚 (西尾市巨海町枯木) と伊川津貝塚 (田原市渥美地域) で出土し、江戸時代には尾張地域平野部と知多半島でも生息していたので (宮尾, 1985; 子安・織田, 2009) 現在での分布の縮小は著しいものがある。生息数の減少は森林の縮小と生活環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

テンは森林性であり、森の中を主要な生活の場としているが、登山道、遊歩道、林道なども日常的に利用している。したがってテンの生息地域では、移動や採食を可能とする植生が失われないように留意し、潜在植生の回復や食物となる小哺乳類を含む生物群集全体を保全しなくてはならない。

【特記事項】

ステンの分布は局限され、紀伊半島南部と四国が主で、これらの地域では 9 割を占めるが、他の地域ではほとんど見られないという (渡辺, 1999)。1737 年に成立したとみられる『尾陽産物志』には、愛知郡、海東郡、知多郡にテンが生息していたことが示されている (宮尾, 1985)。日本哺乳類学会では普通種とされている (佐々木, 1997)。

【引用文献】

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説, 279pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
春日井市, 2010. 平成 20・21 年度自然環境保全地区等候補地二次調査報告 (概要版), 8 pp. 春日井市, 愛知県春日井市.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田統一, 2009. テン. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.87. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小島登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
Masuda, R. 2015. *Martes melampus* (Wagner, 1840). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.258-259. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
宮尾謙雄, 1985. 哺乳類. 西春町史資料編 2, pp.221-259. 西春町史編集委員会, 愛知県西春町.
宮尾謙雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
野呂達哉, 2015. ニホンテン. レッドデータブックあいち 2015 動物編, p.41. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
大羽康利, 2005. 渥美半島「越戸 (おっと) 大山ヘリコプター離着陸訓練場」問題について. しろちどり, (46): 20-21.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.
渡辺茂樹, 1999. ニホンテン. 石川県の哺乳類, pp.63-64. 石川県環境安全部自然保護課, 金沢.

(子安和弘・織田統一)

スナメリ *Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri et Cihir)

【選定理由】

国内には形態的・生態的・遺伝的に個別の特徴を持つ個体群が 5 海域に存在するとされ (Shirakihara & Yoshioka, 2015)、県内のスナメリは伊勢湾・三河湾に生息する小個体群に属する。1991～1994 年の調査結果で 1,900 頭と推定されたが (宮下ほか, 1994)、1,000 頭を割り込む可能性もあり、漁業による混獲、水質汚染・埋め立てなどの環境悪化が個体数を減少させると考えられる。

【形態】

体重 45kg 前後、体長は通常雄で 180cm 以下、雌で 164cm 以下であるが、まれに 200cm 前後に達する個体もある。背ビレはないが、背中中央から小さい隆起が尾ビレに向かってあり、上・下顎の片側に 13～22 対のスペード状の歯を持つ。胸ビレは比較的大きく、体長の約 1/6、尾ビレも大きく、その幅は体長の約 1/4。流線型の体をしているが、マイルカやオオギハクジラのような「くちばし」はもたない (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市 (港区名古屋港・熱田区堀川)、常滑市、半田市、美浜町、南知多町、碧南市、西尾市、豊川市、蒲郡市、豊橋市、田原市 (田口ほか, 2007; 保尊ほか, 2008; 子安・織田, 2009; 栗原ほか, 2013; 齋藤ほか, 2014; 野呂, 2015)。

【国内の分布】

西九州・瀬戸内海、門司から能登半島までの日本海沿岸と、紀伊水道から仙台湾までの太平洋沿岸域 (粕谷・宮崎, 1997)。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、東南アジア、インドの各沿岸域と汽水域。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸性が強く、海岸からほぼ 5～6km 以内の浅いところを好む。10 頭以上の群をつくることもあるが通常は 1～3 頭で遊泳する姿が漁船・フェリーなどから目撃される。三河湾東部におけるストランディングは春期と秋期に増大する (保尊ほか, 2008; 長谷川, 2008; 子安・織田, 2009 など)。名古屋市港区の名古屋港沖で目視される個体数は冬季に最も多く、夏季に少ない。これは火力発電所の温排水の影響で冬季に餌となる小魚が集まるためと考えられている (齋藤ほか, 2014)。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県の南方に広がる伊勢湾・三河湾は、国内における本種の主要な生息海域のひとつとして知られており、宮下ほか (1994) は 1991～1994 年の調査結果から同海域の生息数を 1,900 頭と推定している。漁業での混獲と汚染・埋め立てによる生息環境の悪化が個体数減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

定置網、巻網、トロール、流し網、底刺し網などによる混獲が指摘されている (粕谷・宮崎, 1997)。生息数の推定値の精度を上げ、その変動傾向や要因の調査研究を行い、混獲の影響や有機塩素化合物などの体内蓄積など環境悪化の影響を評価して保全対策をはかる必要がある。沿岸海域における大規模な埋め立て工事の際には、スナメリ個体群の保全対策とモニタリングが必要である。

【特記事項】

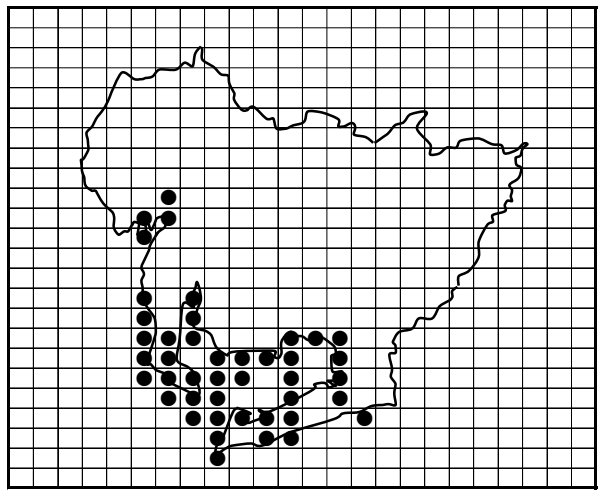
北緯 40 度～南緯 40 度の海域で捕獲禁止 (水産資源保護法施行規則)。水産庁 (2017) レッドリスト外。出村 (1921) は南知多町の篠島周辺で「鯨砂滑等は今尚近海に出没せり」と述べ、三河湾でのスナメリや他のクジラ類の生息を記述している。1939 年に野間灯台 (現美浜町小野浦岩成) 付近に漂着して「ジュゴン」とされた動物 (高島, 1952) はスナメリの幼獣であったことが示されている (保尊ほか, 2010)。種の保存法による国際希少野生動物種。化石は、瀬戸内海の後期更新世から出土している (Shirakihara & Yoshioka, 2015)。

【引用文献】

- 長谷川修平, 2008. 伊勢湾におけるスナメリのストランディング. 勇魚, (48): 25-32.
保尊 脩・子安和弘・織田統一, 2008. 愛知県三河湾におけるスナメリのストランディング記録 6. マンモ・ス特別号, (10): 53-57.
保尊 脩・曽根啓子・子安和弘, 2010. 愛知県におけるジュゴンの報告について. マンモ・ス特別号, (12): 12-16.
出村 鉄, 1921. 篠島史蹟, 151pp. 博信社, 名古屋市.
粕谷俊雄・宮崎信之, 1997. クジラ目 CETACEA. レッドデータ日本の哺乳類, pp.139-185, 221-233. 文一総合出版, 東京.
子安和弘・織田統一, 2009. スナメリ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.88. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
栗原 望・大池辰也・川田伸一郎・子安和弘・織田統一, 2013. 三河湾におけるスナメリ (*Neophocaena phocaenoides*) の漂着ならびに混獲に関する記録. 哺乳類科学, 53: 99-106.
宮下富夫・島田裕之・帝釈元・浅井康行, 1994. 伊勢・三河湾におけるスナメリの密度とその季節変動. 平成 6 年度日本水産学会秋季大会講演要旨, p.58. 三重大学, 津市.
野呂達哉, 2015. スナメリ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.44. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
齋藤 豊・室崎正博・祖 一誠, 2014. 名古屋港に生息するスナメリの調査. 海洋と生物, 36(1): 29-35.
Shirakihara, M. & Yoshioka, M. 2015. *Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri & Cihir, 1972). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.258-259. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
水産庁, 2017. 海洋生物レッドリストの公表について. <http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/sigen/170321.html>
田口美緒子・吉岡 基・柏木正章, 2007. 三河湾湾口部におけるスナメリの分布密度の季節変化. 哺乳類科学, 47: 11-17.
高島春雄, 1952. 日本近海におけるジュゴンの 1 例. 日本哺乳動物学会報, (3): 5.

(子安和弘・織田統一)

県内分布図



オヒキコウモリ *Tadarida insignis* (Blyth)

【選定理由】

愛知県内では名古屋市でのみ確認されている(野呂, 2015)。国内に6カ所知られている生息地では、いずれも集団での生息、夏期(7~8月)の繁殖、冬季の休眠をおこなうことが知られている。愛知県の近隣では三重県の無人島での集団生息や静岡県における集団生息地が知られているもの(Sano, 2015)、県内では生息状況が不明なため「情報不足」に選定した。

【形態】

2種知られている日本産オヒキコウモリ属の大型のもので、前腕長57~65mm、頭胴長84~94mm、尾長48~56mm。腿間膜から長く突出した尾と、きわめて大きな耳介が特徴である(前田, 2014)。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市中区、守山区(野呂, 2014; 2015)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州の30カ所以上の記録がある。集団の生息が確認されたのは4カ所の無人島、京都府(舞鶴湾上の沓島：繁殖)・三重県(紀北町の耳島：生息)・高知県(蒲葵島：繁殖)・宮崎県(枇榔島：繁殖)、および島以外の2カ所、静岡県(海に突き出た岸壁)・広島県(学校：改築で2004年には3頭まで減少)である(Sano, 2015など)。

【世界の分布】

日本、台湾、ロシア沿海地区、朝鮮半島、中国(Sano, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

オヒキコウモリの単独個体が偶然に発見された場合、それは「生息個体数」に含まれないとみなされている(前田, 2014)。日本国内で確認された6地点の生息地では、無人島の岩の割れ目、および家屋の隙間を隠れ家としている(Sano, 2015)。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県の近隣では、三重県いなべ市での複数個体、静岡県と三重県南部熊野灘洋上の耳島での集団生息が知られている(寺西, 1985; Sano, 2015)。愛知県における繁殖集団の存在は未確認であるが、その存在が確認された場合には、生息集団の生息環境の破壊や攪乱が極めて大きな減少要因となる。

【保全上の留意点】

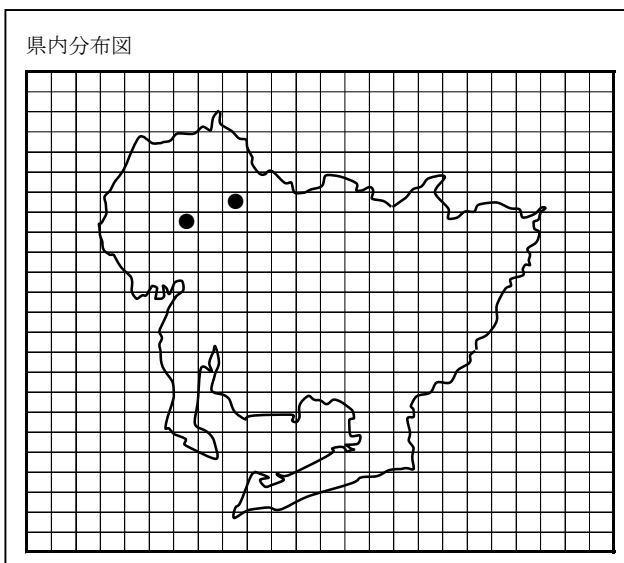
名古屋市の都心部で2011年10月7日に発見された雌個体は、歯の摩滅程度から当歳獣で(野呂, 2014)、繁殖地からの分散個体の可能性も高い。したがって、名古屋市内で発見された若い個体の繁殖地は、名古屋市近郊の陸地にとどまらず、伊勢湾や既知の生息コロニーのある三重県熊野灘洋上の耳島(Sano, 2015)など近隣島嶼の可能性もある。保全上の留意点として、名古屋市内で発見された個体の由来する壱や繁殖地の特定を含む今後の調査・研究が挙げられる。

【特記事項】

愛知県内でオヒキコウモリの生体が直接確認された名古屋市中区丸の内にあるビル8階では、「トイレの壁」にしがみついていたという(野呂, 2014)。この雌個体や三重県いなべ市で2回発見された雌2頭(1972年7月と1978年3月：寺西, 1985)の生息地や繁殖地の所在地は不明であるが、これらの発見された場所が静岡県と三重県の集団生息地に挟まれていることは興味深い。

【引用文献】

- 前田喜四雄, 2014. オヒキコウモリ. Red Data Book 2014, 1 哺乳類, pp.74-75. ぎょうせい, 東京.
野呂達哉, 2014. 愛知県名古屋市におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の初記録. なごやの生物多様性, 1: 65-69.
野呂達哉, 2015. オヒキコウモリ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.51. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
Sano, A. 2015. *Tadarida insignis* (Blyth, 1861). The wild mammals of Japan, 2nd ed., pp.130-131. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
寺西敏夫, 1985. ほ乳類雑記(4) 1984.1-1984.12.15. マンモ・ス, (39): 2-7.



ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck

【選定理由】

県内のアナグマについては断片的な情報しか得られていないが、分布域は不連続的で狩猟圧もあるため今後個体数を減少させる可能性がある。個体数のモニタリングのための早急な基礎調査・研究が必要とされている。

【形態】

頭胴長 440~680mm、尾長 116~180mm、後足長 57~91mm、耳介長 38~47mm、頭骨最大長 109.3~113.0mm。頑丈な体に太く短い四肢を持ち、手の爪は特に強大。耳介は小さく円盤状の鼻鏡をもつ。尾は短い。頭蓋では吻が比較的短く、鼓室胞が小さい。上顎の第 4 小臼歯は発達が悪く、他のイタチ科のように「裂肉歯」としての機能を果たしていない。上顎第 1 大臼歯は四角形をしている。日本産のアナグマの歯式は I3/3,C1/1,P3/3,M1/2=34 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、小牧市 (東部の山地)、春日井市、名古屋市 (緑区鳴海町：野呂, 2015)、知多市 (北浜町)、豊田市、岡崎市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊川市、豊橋市、田原市 (宮尾ほか, 1984；子安・織田, 2009；子安ほか, 2016；藤井ほか, 2016；子安, 2018)。

【国内の分布】

本州、四国、九州、小豆島 (子安・織田, 2009)。

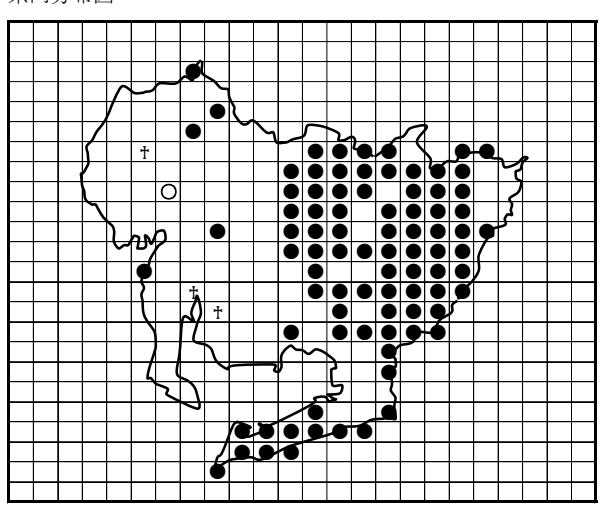
【世界の分布】

日本固有種 (Kaneko, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低山帯の森林や低木林に巣穴のトンネルを掘って生活している。巣穴には血縁の家族群ですみ、ミミズ類、昆虫類、両生類、果実類などを食べる。繁殖期は春で、1 回に 1~4 仔を産む。完全な「冬眠」はしないが、厳冬期には穴の中にももってなかなか外にでないことがある。秋には越冬にそなえて採餌活動の量が増える。完全な夜行性なので、アナグマの巣穴の使用状態を知るには、巣穴の入り口に立てかけた木の枝が翌朝動いているか見ればよい。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

現在のところ、尾張丘陵部と知多半島を除いた県内に広く分布が見られるが、分布域はパッチ状である (宮尾ほか, 1984)。尾張丘陵部と知多半島での絶滅はかなり以前であると考えられている (宮尾ほか, 1984)、近年知多半島で確認されるようになった (野呂, 2015；藤井ほか, 2016)。個体数が比較的多いと考えられる三河山間部では、農産物に被害をもたらすことを理由に捕獲されることもあり、市街化による環境悪化とあいまって個体数を減少させる可能性があるが、現状ではあまりにも情報が不足していて正確な評価を下すのが困難である。

【保全上の留意点】

2013 年に名古屋市緑区のブドウ畑で捕獲された個体の生息地は市街化によって孤立化しており、地域的な絶滅に注意が必要である (野呂, 2015 参照)。都市近郊のニホンアナグマ生息地における早急な生態調査・研究が必要とされている。

【特記事項】

県内の先史遺跡でアナグマの遺存骨の出土が見られたのは、亀山遺跡 (渥美郡福江町)、保美貝塚・伊川津貝塚 (田原市渥美地域)、大蚊里貝塚 (豊橋市大村町)、八王子貝塚・枯木宮貝塚 (西尾市)、朝日遺跡 (清須市)、大曲輪貝塚・下内田遺跡 (名古屋市)、宮西貝塚 (知多郡東浦町) である (子安・織田, 2009 など)。日本哺乳類学会では普通種とされている (佐々木, 1997)。

【引用文献】

- Kaneko, Y. 2015. *Meles anakuma* Temminck, 1842. The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.266-268. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
藤井太一・川本宏和・白子智康・上野 薫・南 基泰, 2016. 愛知県知多市臨海工業地帯企業緑地におけるカメラトラップ法による哺乳類調査. 日本緑化工学会誌, 42: 320-329.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田統一, 2009. アナグマ. レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.89. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
野呂達哉, 2015. ニホンアナグマ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.43. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
佐々木 浩, 1997. イタチ科 Mustelidae. レッドデータ日本の哺乳類, pp.100-107. 文一総合出版, 東京.

(子安和弘・織田統一)

ニホンジネズミ (佐久島の個体群) *Crocidura dsinezumi* (Temminck)

【選定理由】

北海道、本州、四国、九州と佐渡島などの属島に広く分布し、県内での分布も広いが、県内の島嶼部では佐久島 (西尾市) のみに分布が認められ、本県島嶼部に生息する唯一の食虫類種として貴重である。島嶼部では生息個体数も限られ、また外部地域からの移住機会も偶然以外には通常あり得ないために地域個体群として絶滅の可能性がある。下顎骨形態の比較から、佐久島の個体群は愛知の個体群と別グループをつくることが明らかにされた (高田, 2004)。

【形態】

体重 5.0~12.5g、頭胴長 61.0~84.0mm、尾長 39.0~54.0mm、後足長 11.5~15.0mm、耳介長 7.1~9.1mm、頭骨最大長 16.5~19.3mm。尾率 70%前後の中型のジネズミ。尾の基半部には剛毛がある。毛色は腹面で淡灰褐色であるが、背面は暗赤褐色から暗褐色まで変異に富んでいる。頭骨は比較的大きく、脳頭蓋は卵形をしている。眼窩下孔の後縁は上顎第 1 大臼歯中央を通る線上ないし前方にある。歯式は通常 I3/1, C1/1, P1/1, M3/3=28 とされている (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、小牧市、春日井市、名古屋市、瀬戸市、日進市、豊明市、知多市、豊田市、みよし市、安城市、西尾市 (一色町佐久島、吉良町)、設楽町、豊根村、新城市、豊川市 (宮尾ほか, 1984; 原田, 1996a; b; 小鹿, 2005; 子安・織田, 2009; 野呂, 2015; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。弥生時代中期の朝日遺跡 (清須市朝日貝塚) で下顎骨が出土している (山崎・織田, 2005)。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、ならびに佐渡島、淡路島をはじめとした属島 (高田, 2004)。

【世界の分布】

日本および韓国済州島 (Motokawa, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

ニホンジネズミは森林中の下生え、アカマツ林、照葉樹林、溪流の岸辺、水田の畦、農耕地、休耕地、河川敷、人家周辺の石垣などに生息する (本川, 1998)。小型昆虫やクモ類、ジムカデなどを捕食し、雌は春に 3~4 頭の仔を産み、寿命は 1 年余という (阿部, 1994)。

【現在の生息状況／減少の要因】

島嶼個体群としては県下では佐久島のみが知られており、その生息は佐久島内に限られる。人家周辺の大規模工事や生物多様性に配慮しない改修工事などによって生息可能な環境の破壊や縮小が進行すると考えられる。

【保全上の留意点】

島嶼部以外では稀な動物ではないが、愛知県の属島としては唯一三河湾の佐久島にのみ生息する。民家に入ることもあるが、完全な住家性ではなく人家周辺の攪乱されやすい環境に生息している。したがって、人家周辺の環境整備などの際には生息環境の保全に留意すべきである。

【特記事項】

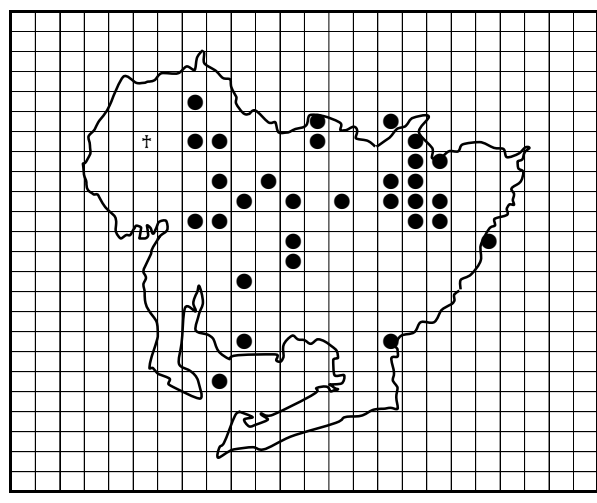
北海道、本州、四国、九州以外では以下の国内の島々に生息 (高田, 2004; Motokawa, 2015)。淡路島、飛島、粟島、佐渡島、島後、西ノ島、知夫里島、利島、新島、式根島、佐久島、大三島、上蒲刈島、能美島、芸予大島、屋代島、見島、相島、沖ノ島、中通島、福江島、上甕島、中甕島、下甕島、種子島、屋久島、口永良部島、口之島、中之島。北海道と済州島の分布は人為的な移入と考えられている (Motokawa, 2015 参照)。化石は本州と九州の中期・後期更新世から (Motokawa, 2015)。

【引用文献】

- 阿部 永, 1994. モグラ目 INSECTIVORA. 日本の哺乳類, pp.17-36. 東海大学出版会, 東京.
原田猪津男, 1996a. ほ乳類. 稲武町史・自然・本文編, pp.508-513. 稲武町, 愛知県北設楽郡稲武町.
原田猪津男, 1996b. ほ乳類. 設楽町誌『自然編』「資料編」, pp.585-593. 設楽町, 愛知県北設楽郡設楽町.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田統一, 2009. ニホンジネズミ (佐久島の個体群). レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.90. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その 3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
本川雅治, 1998. 日本産ジネズミ亜科の自然史. 食虫類の自然史, pp.275-349. 比婆科学教育振興会, 庄原市.
Motokawa, M. 2015. *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.23-24. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
野呂達哉, 2015. ホンジネズミ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.34. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモ・ス特別号, (7): 4-9.
高田靖司, 2004. 島におけるジネズミの形態分化. 哺乳類科学, 44(1): 17-24.
山崎 健・織田統一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類(縄文時代~弥生時代). マンモ・ス特別号, (7): 10-16.

(子安和弘・織田統一)

県内分布図



コウベモグラ (名古屋城外堀の個体群) *Mogera wogura* (Temminck)

【選定理由】

国内では、本州中部以南、四国、九州ならびに隠岐諸島などの属島に広く分布し、県内での分布も広いが、通常は地上へ出ない地中性の生態特性が強いため都市化の進行に伴って個体群の分断がおきやすい。島嶼部では生息個体数も限られ、また外部地域からの移住機会も偶然以外には通常あり得ないために地域個体群として絶滅の可能性がある。地中性のコウベモグラにとって、名古屋城外堀 (名古屋市中区) で発見されたコウベモグラは都市という「海」に囲まれた「陸の孤島」に住む個体群で、常に絶滅の危機にさらされている。

【形態】

体重 48.5~175.0g、頭胴長 125.0~185.0mm、尾長 14.5~27.0mm、前足長 16.8~25.5, 22.0~33.0mm (爪を含む)、前足幅 16.0~25.0mm、後足長 16.5~24.0mm、頭骨最大長 33.0~42.1mm。体の大きさはきわめて変異に富み、九州西南部 (種子島、屋久島を含む)、九州山地、対馬などの小型個体群と本州中部の大型個体群では体重で2倍ほどの差がある。歯式は I3/2, C1/1, P4/4, M3/3=42、脊柱式は C7+T14+L5+S6+Cd12=44 (子安・織田, 2009 など)。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、一宮市、稲沢市、岩倉市、北名古屋市、名古屋市、瀬戸市、尾張旭市、東郷町、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、設楽町、新城市、豊川市、豊橋市、田原市など県下に広く分布する (宮尾ほか, 1984; 愛知県商工部万博誘致対策局, 1996; 小鹿, 2005; 子安・織田, 2009; 子安ほか, 2016; 子安, 2018)。弥生時代中期の朝日遺跡 (清須市朝日貝塚) で上顎骨・上腕骨など4点が出土している (山崎・織田, 2005)。

【国内の分布】

本州南西部、四国、九州および隠岐諸島、対馬、五島列島、小豆島、淡路島、種子島、屋久島 (Kawada & Yokohata, 2015)。

【世界の分布】

日本固有種 (Kawada & Yokohata, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から低山帯の農耕地、草原に多く、森林内の生息密度は低い。地下にトンネルをつくり繁殖期以外は単独のナワバリをもつ。昆虫類、ミミズ類が主食で、秋には植物の種子なども食べる。通常は春に1回繁殖し、2~6頭の仔を産む。寿命は3年余りだが、3年以上生きるものは稀 (子安・織田, 2009 など)。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城外堀 (名古屋市中区三の丸の犬津橋周辺) にコウベモグラの生息することが発見されたのは2002年5月のことである。その後の調査での捕獲個体も含めると雄4頭、雌5頭の合計9個体が捕獲されている (植松ほか, 2004)。この個体群は市街地に囲まれて隔離されており、生息範囲も小さいで構成する個体数も少ないと考えられ、特段の要因がなくとも絶滅の可能性がある。

【保全上の留意点】

名古屋城外堀のコウベモグラの生息地は大半が斜面であり、岩礫で構成される底面 (かつての瀬戸電気鉄道外堀線の軌跡) には生息の痕跡が認められない (植松氏私信)。したがって、この個体群が現在の外堀全体に生息していると見なすのは誤りで、きわめて脆弱な生息環境であることを認識し、常に個体数減少をもたらす要因を排除するためのモニタリングと保全策が必要である。

【特記事項】

名古屋城外堀のコウベモグラは日本最大とされていた本州中部の大型個体群よりさらに大きな体をもつ、日本でも最大のコウベモグラと考えられていた (植松ほか, 2004)。安城市里町の農地では、この個体群とほぼ同じ体サイズの個体が捕獲されている (風間ほか, 2014)。

【引用文献】

愛知県商工部万博誘致対策局, 1996. アズマモグラ・コウベモグラ. 瀬戸市南東部地区に生息する生物の多様性に関する調査, pp.26-29. 愛知県商工部万博誘致対策局, 名古屋.
Kawada, S. & Yokohata, Y. 2015. *Mogera wogura* (Temminck, 1842). The Wild Mammals of Japan, 2nd ed., pp.36-37. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
子安和弘, 2018. 人家から奥山まで生息する哺乳類. 新修豊田市史 別編 自然, pp.586-603. 豊田市, 豊田.
子安和弘・織田銃一, 2009. コウベモグラ (名古屋城外堀の個体群). レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.91. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
子安和弘・岡田慶範・小鹿登美・吉村文孝, 2016. 哺乳類. 豊田市生物調査報告書<分冊その3>, pp.337-367. 豊田市, 豊田.
風間健太郎・風間麻未・立川佳晴, 2014. 愛知県安城市で捕獲された日本最大サイズのコウベモグラ *Mogera wogura*. 三河生物, 6: 57-60.
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
小鹿登美, 2005. 愛知県安城市の哺乳類の記録. マンモ・ス特別号, (7): 4-9.
植松 康・酒井英一・高田靖司, 2004. 名古屋城外堀で採集されたコウベモグラの体の大きさ. 第36回成長談話会大会, 抄録集: 10.
山崎 健・織田銃一, 2005. 愛知県における遺跡出土の食虫類・齧歯類(縄文時代~弥生時代). マンモ・ス特別号, (7): 10-16.

(子安和弘・織田銃一)

